

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告**FIDIC-2007 シンガポール大会
プログラム概要**

今年のFIDIC大会はシンガポールで開催されました。「Global services, enhanced partnerships」をメインテーマに、全体講演、各種委員会、9つのワークショップ、地域会議、総会などで活発な議論が行われました。また、初日の全体講演では、国際協力銀行(JBIC)プロジェクト開発部の飯島聡部長が「Japanese ODA Loans and FIDIC」というテーマで講演されました。

日本からは33名が参加しました。

開催期間：2007年9月9日(日)～9月13日(木)

開催地：シンガポール市

メインテーマ：Global services, enhanced partnerships

プログラム**Sunday 9 September**

FIDIC CBC Meeting
FIDIC YPMTP working session
FIDIC IMC meeting
FIDIC BPC meeting
FIDIC SDC meeting
FIDIC RLC meeting
Directors and Secretaries Meeting
Directors and Presidents Meeting
Welcome Reception: Civilisations Museum

Theme 2: Challenges

Workshop 4 Choosing the best advisor
Workshop 5 Growing and sharing expertise
Workshop 6 Collaboration or risk all

Theme 3: Tools

Workshop 7 Partnering for profit
Workshop 8 Delivering quality services
Workshop 9 Capacity utilisation
ASPAC Executive Meeting
FIDIC GAMA Task Force Meeting

Monday 10 September

Opening Ceremony Suntec
Plenary Session
-Minister of National Development, Singapore
-Asian Development Bank, Vice-President
-World Bank, Chief Procurement Policy Officer
-Japan Bank for International Cooperation, Director
-Leighton Asia, Managing Director
-Maunsell-AECOM Hong Kong, Group Chief Executive

Wednesday 12 September

Business Practice Workshop: BIMS
Business Practice Workshop: PSM
FIDIC YP SC meeting
ASPAC Asia Networking Seminar and GAM
ASPAC Asia Networking lunch
GAMA Africa Networking Seminar
YPMTP Future Leaders' Workshop
FIDIC GAM
YP Open Forum
Gala Dinner

Tuesday 11 September

Theme 1: Opportunities
Workshop 1 New market opportunities
Workshop 2 Professional recognition
Workshop 3 The power of people

Thursday 13 September

FIDIC DBO Contract Seminar (Optional)

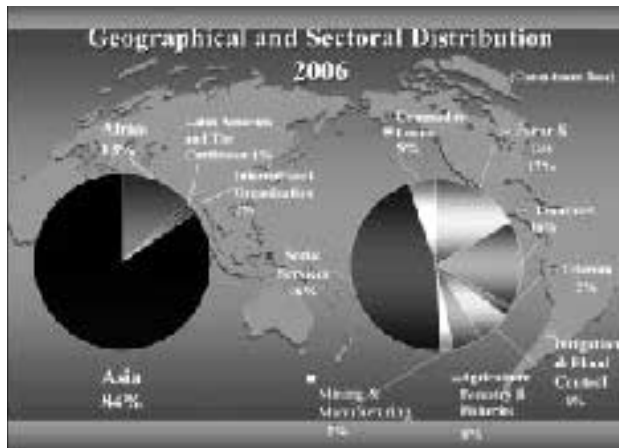
FIDIC-2007 シンガポール大会参加者 一覧

会社名	所属	氏名
いであ	広島支店 建設コンサルタント事業部 橋梁グループ グループマネジャー	伊藤 茂也
NJS コンサルタンツ		Takeuchi Mark
OYO インターナショナル(株)	代表取締役社長	田中 達吉
(有)大野化学機械工業所	代表取締役社長	大野 欣雄
京都大学 (大本俊彦建設プロジェクト・ コンサルタント)	教授	大本 俊彦
(株)オリエンタルコンサルタンツ	代表取締役社長	廣谷 彰彦
(株)オリエンタルコンサルタンツ	国際事業部	中島 剛
(株)オリエンタルコンサルタンツ	社会環境事業部	渡津 永子
(株)ACK グループ	経営企画本部 国際企画室長	藤岡 和久
(株)建設技研 インターナショナル	業務本部 営業企画室長	前田 剛和
(株)建設技術研究所	代表取締役会長	石井 弓夫
(株)建設技術研究所	常務取締役	内村 好
(株)建設技術研究所	経営企画部 次長	河上 英二
(株)建設技術研究所	経営企画部 担当部長	金井 恵一
(株)建設技術研究所	東京本社 防災室長	遠山 正人
高木技術士事務所	所長	高木 秀雄
(株)東京設計事務所	東京支社 下水道グループマネージャー	狩谷 薫
(株)日水コン	海外事業部 業務部長	桜井 一
(株)日水コン	河川事業部 副事業部長	藏重 俊夫
(株)日水コン	東京下水道事業部技術第1部 部長	春 公一郎
(株)日水コン	下水道事業開発部 担当部長	秋永 薫児
(株)日水コン	東京下水3部1課長	赤坂 和俊
(株)日本工営	コンサルタント海外事業本部 地域社会事業部 副事業部長	関 好
(株)日本工営	コンサルタント海外事業本部 民活プロジェクト部 課長	藤原 亮太
早房技術士事務所	所長	早房 長雄
賛助会員		竹村 陽一
国際協力銀行 (JBIC)	理事	武田 薫
国際協力銀行 (JBIC)	プロジェクト開発部 部長	飯島 聰
国際協力銀行 (JBIC)	プロジェクト開発部 調達監理班 課長	宮尾 泰助
西村あさひ法律事務所	弁護士	小泉 淑子
京都大学		OSHIMA, KUNIE
AJCE	元事務局長	藤江 五郎
AJCE	事務局長	山下 佳彦

日本人参加者 33名

国際協力銀行 プロジェクト開発部
部長 飯島 聡





Standard Conditions

(Chart Based Data, 2006/2007)

Country	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions
China	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions
India	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions
Japan	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions
USA	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions
UK	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions
Other	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions	Standard Conditions

Tying Status

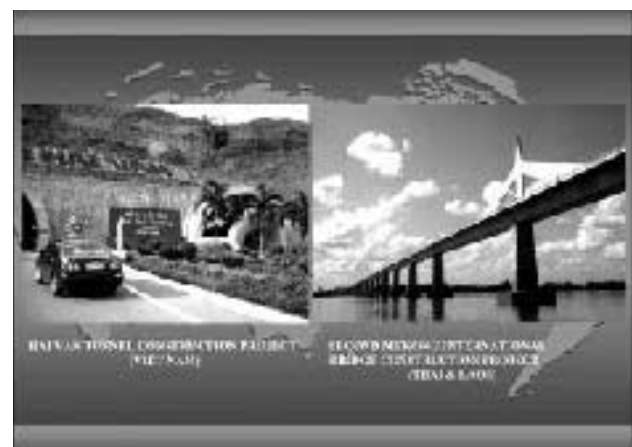
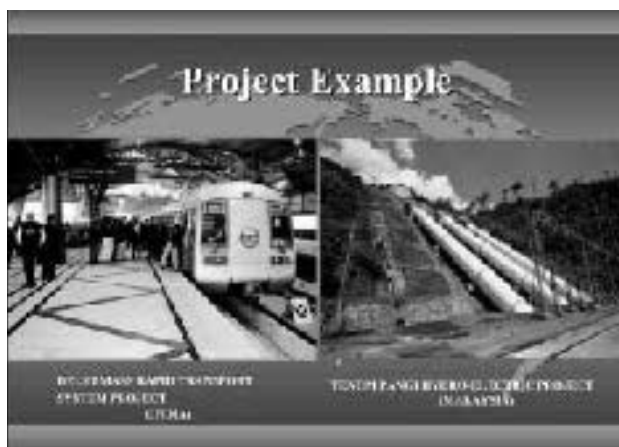
(Chart Based Data, 2006/2007)

FY	General Contract	Partial Contract	Related Contract	Total	Total
2002	88.1	0.0	3.5	91.6	100
2003	92.1	0.0	2.1	94.2	100
2004	73.7	12.1	0.3	86.1	100
2005	89.9	0.2	0.0	90.1	100
2006	91.3	1.3	0.0	92.6	100

Employment of Consultants Contract Concurrence Amount

(Chart Based Data, 2006/2007)

FY	Number of Contracts	Amount	Ratio of General Contract
2002	55	\$ 337 million	3.5%
2003	45	\$ 285 million	2.8%
2004	76	\$ 180 million	7.1%
2005	76	\$ 170 million	7.1%
2006	53	\$ 222 million	7.8%



Future Directions

"US\$ 10 billion Increase of Japanese ODA"
(Statement at G8 Gleneagles Summit, July, 2005)

"Integration of ODA Operations"
(New JICA : Grant Aid + Technical Assistance + Loan)

Feature: Quality Based Lending

Consultant: QBS Selection

Construction: Pre-Qualification, Two-Envelope

Procurement

- Guidelines for the Employment of Consultants
- Guidelines for Procurement



- Japanese ODA Loans
- Consultants' Role in our Loans
- FIDIC and Us
- Issues and Challenges

Types of Assignment

- Preinvestment studies
- Preparation services
- Implementation services
- Other services

Responsibilities of Consultants

Independent Engineer
"Faithful adviser to the Borrower"
Adviser with little authority

Selection Method: QBS

Discussions concerning costs shall be conducted only after the highest ranked consultant is invited. (Sec. 3.01, 3.08)

- Japanese ODA Loans
- Consultants' Role in our Loans
- FIDIC and Us
- Issues and Challenges

Sample Bidding Documents

- Our SBD for Civil Works (1999) documents
FIDIC Red book 4th Ed (1987)
- Other Sample Documents :
 - Supply and Installation of Plant and Equipment
 - Turnkey Contracts
 - Goods
 - Smaller works (Civil Works)
 - Consultancy

(<http://www.jica.go.jp/ajce/infocent/guide/index.php>)



International Contract Administration Course

- Curriculum and Course materials were developed / originated by AJCE
- 5 day seminar was conducted at Asian Institute of Technology in Thailand on Feb. 2007
- Invited 23 Government Officers mostly project managers of JICA Loan Recipient Countries in Asia




Check List for One Sided Contracts

- Drafted by AJCE
- Actual examples of contract clauses prepared by the borrower which check fair risk allocation among parties.
- Being used for our review when we give concurrence to borrowers

(<http://www.jica.go.jp/ajce/infocent/guide/index.php>)



Check List for One Sided Contracts

Examples :

- Excessive approval requirement by the Employer for the Engineer's decision
- Employee of the Employer is serving as the Engineer

Cooperation with FIDIC

- Japanese ODA Loans
- Consultants' Role in our Loans
- FIDIC and Us
- Issues and Challenges

Current Issues

- Acceleration
- Transparency
- E-Procurement

Cooperation with FIDIC

- More FIDIC knowledge to Developing Countries
- Increase Adjudicators in Asia for DAB

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告**Plenary Session 2 Minister of National Development, Singapore
全体講演2 シンガポール国家開発大臣**株式会社建設技術研究所 経営企画部担当部長
技術研修委員会副委員長 **金井 恵一****日時：**9月10日(月) 9:20～9:40**場所：**Ballroom 2, Suntec City**来賓：**シンガポール国家開発大臣 Mr. Mah Bow Tan**内容：**来賓挨拶は、当初予定されていたインドネシア産業大臣が欠席となったため、シンガポール国家開発省のMah Bow Tan大臣のみとなった。大臣は冒頭、折からの雨天に触れ、「あいにくの雨だが、雨は水資源に乏しいシンガポールにとっては、大変にうれしいこと、今日は我々にとってはラッキーな日です。」と会場を沸かせたあと、以下の要旨のスピーチをされた。

2007年のFIDIC年次大会が、ここシンガポールで開催され、世界中のプロフェッショナルをお迎えできることは大変喜ばしい限りである。

Challenges of Globalization

トマス・フリードマンがかつてその著書で述べたように、工業国と新興国の間の競争の土俵は平坦化しており、今も時々刻々と、物やサービスの自由交易は世界中で進行しつつある。今年の本大会のテーマである「Global Services, Enhanced Partnerships」は、まさにこうした我々の直面する状況に対応した、時機を得たものであると考える。建設業界の国際性に鑑みれば、グローバル化の波はより広範な顧客層とより高い品質・基準への要求をこの業界にもたらしてきているからである。

こうしたグローバル化の試練に立ち向かうには、世界中のプロフェッショナル同士は言うまでもなく、プロフェッショナルと業界と政府との間での、効果的な提携や協力関係の構築が、鍵である。ここは、FIDICが重要な役割を果たすことが期待されているところである。

Singapore's Experience**Open Market Policy**

42年前の独立以来、保護主義を捨て、市場開放に徹して外国資本を呼び込み、技術や経営ノウハウを導入し、世界輸出市場への足がかりを得てきた。現在のグローバル化の中でも引き続き他の経済圏とのネットワー

クを保ちつつ、わが国への投資家に対して付加価値を与えることにより競争に打ち勝つ力を育みつつある。

Collaboration

グローバルな都市づくりのための国際協力の重要性も充分認識している。わが国の建設市場は常に開放されており、セントーサ島やマリナベイなどの複合リゾートに代表される世界的インフラは、海外の力を得てできたものである。我々は、国際的コンサルタントと我が国のコンサルタントやコントラクターの協力による事業を大歓迎する。

Benchmark against the Best Global Practice

我が国の建造物の世界標準への適合を確保するために、我々は法規制の要求や手続き、実務を国際標準に照らして検証している。このために英国、米国、NZから優れた実務家を呼び、我々の建築管理体制の査定や改善への提言などを受けている。

Sharing our Experience

近年、我が国のプロフェッショナルは海外市場でそのサービスを提供し始めている。また、Building & Construction Authority (BCA、建築・建設庁)の方針や法規制の経験などが他の国から参考例として求められるようになってきている。こうして我が国の経験やノウハウを他国と分かち合い、国際的に貢献できることは我々にとっても励みとなっている。

これまで述べてきたシンガポールの経験は、FIDICが今後グローバル化の試練に対応して行く上で何らかのお役に立つのではないかと考えている。

Sustainable Global Development

グローバル化の波は試練であるとともに、世界的な開発ブームの中でコンサルティング・エンジニアにとって大きな機会の出現でもある。また、高まる環境問題への関心の中で、コンサルティング・エンジニアは持続可能な建設業務を推進する上で大きな役割を担っている。

こうした状況下、シンガポールでも持続可能な開発に向けた取組みを種々行っている。我々は、建造物の環境保持についての最低基準を法制化する予定であり、

関連の研究開発を奨励している。この面で、国際的なパートナーが積極的な役割を果たしてくれることを大歓迎したい。

Conclusion

今年のテーマ、「Global Services, Enhanced Partnerships」は、サービスのグローバル化に直面する業界にとって時機を得たものである。高品質のインフラへのいや増す要

求を満たしてゆくための優れたパートナーシップ作りに向け、お集まりの皆様方がそれぞれの議論においてその知識や洞察を交換されることと思う。また、この会議は様々な提携や協力関係の構築には絶好の機会となることであろう。

この大会のご成功と、皆様の快適で実り多きシンガポール滞在を祈念する。ご静聴に感謝する。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Plenary Session 3 Asian Development Bank・World Bank 全体講演3 アジア開発銀行・世界銀行

株式会社建設技術研究所 経営企画部次長
国際活動委員会 QBS 分科会長・政策委員会 河上英二



1. 日 時：2007年9月10日(月) 10:45～12:00

2. 場 所：サンテック 2階 Ballroom2

3. 議長及び参加者

議長：Jorge Diaz Padilla, Mexico：FIDIC 会長

報告者：

① Lowrence Greenwood：アジア開発銀行 Vice-President

「アジアのインフラを開発するための協力一機会と挑戦」

■ 高い経済成長

現在、アジア・太平洋地域は世界的にも非常に高い経済成長をしている地域である。典型的な中国は10.7%、インドは9.2%。この地域のグローバル化、自由化などによって全体的に上昇している。

■ 挑戦すべき課題

・ 貧困問題：未だに繁栄と貧困の2つの顔を持った地域である。

貧困を救うためのインフラ投資は、ADBが抱える途上国が必要とするインフラの研究によると向こう10年間で最低でも3.7兆ドルが必要で、その約80%は中国とインドが対象である。

資金調達も公共事業への投資を中心とすることやPPPの活用、多国間にまたぐプロジェクトの発掘などで不足を調達する。

・ 環境破壊とエネルギー需要の爆発的な増加

ADBはクリーンエネルギーを供給側、需要側いずれの立場からも推進する。風力、太陽、バイオなどの再生可能なエネルギーの開発と供給、利用側としては照明

や温度調整などの省エネに積極的に取り組んでいる。

■ FIDICとの協力

ADB資金の60%がインフラプロジェクトへの投資であり、その企画、設計、実行などは90%以上コンサルタントが担っており、明らかにFIDICはADBにとって重要なパートナーである。プロジェクトに関わるコンサルタント業務の品質が重要であることも良く知っている。

また、腐敗がプロジェクトを失敗させる大きな要因であることを知っており、ADBでは昨年、腐敗防止のアクションプランを作成し、実行中である。また、政府への指導強化も図っており、その点ではFIDICのBIMSを反映させた政府向けGPIMSの開発には感謝している。

今後とも協力をお願いしたい。

② Berard Becq：世界銀行 Chief Procurement Policy Officer

■ 世界銀行の活動状況について

- ・ 腐敗防止の強化、透明性・競争性が進む。能力開発。
- ・ 調達のドキュメント作成やBIMILACIを通じたFIDICとMDBとの協力
- ・ 2006年はここ6年間で最も多い236億ドルの融資が行われ、その内73億ドル(31%)が政策策定業務への融資であった。また、その内約半分はアジア・太平洋地域であった。

■ 重点事項と挑戦

- ・ 各国の調達の仕組みの強化(透明性やシステム化)や地域の能力開発のサポート
- ・ ただし、調達のシステムは使用国の使いやすさに配

慮し、複雑さや高度化は避ける

- ・プロジェクト及び調達における品質の確保－閾値を設けて適切に運用する
- ・コンサルタントに関する課題：Quality (技術と倫理) やクライアントとのよき関係を保証するための政策、Quality に影響の大きい技術力の低下やリスクを抑制するための能力開発とその維持、腐敗との戦い(発注機関との協力が必要)
- ・適切な選定は、規則の質やその規則を適切に運用できるかどうか、利用者の能力による。
- ・Quality が低下している(安さと高い品質の関連はない、QCBS が全ての原因ではない)、何が必要かを考えて選定方法を決めるべき。
- ・能力開発：Quality を高めるのに必要。選定の方針と

運用を一致させるべき。

- ・倫理や公正：Quality の実現には ethics や integrity を供えた仕組みが必要。ツールの統合や活用を進める。
- ・調達における透明性、競争性の増加：透明性や効率性、経済性、効果などが広く求められている。コンサルタントの競争的な選定

4. 感想

いつも聞かれるハーモナイゼーションであるが、対融資国政府、また対コンサルタントとその仕組みの体系化や整理が整いつつあるように感じた。Quality の重要性(なにがあったのかは?である)をいつになく多く説明されていた。途上国の QBS 反対の意見あり。



ADB : Greenwood 氏



WB : Becq 氏

特集：2007 年 FIDIC シンガポール大会報告

Plenary Session 4 Leighton Asia ・ Maunsell-AECOM Hong Kong 全体講演 4 Leighton 社 (オーストラリア) ・ Maunsell-AECOM 社 (香港)

株式会社建設技術研究所
東京本社防災室長 遠山正人



初日の全体フォーラムのプログラムのうち、午後の講演とパネルディスカッションについて報告する。

1. 日 時：2007 年 9 月 10 日 (月) 14：00～17：00
(途中コーヒブレイクあり)

2. 場 所：サンテック 2 階 Ballroom2

3. 講演等の概要

① 講演者：飯島 聡氏、JBIC、プロジェクト開発部長
講演テーマ：

日本の ODA と FIDIC

(原文 “Japanese ODA Loans and FIDIC”)

講演の概要：(別途報告)

② 講演者：David Savage 氏、Leighton Asia (Southern), 社長

講演テーマ：

プロジェクト最適化のための提携・遂行契約－原理と利益

(原文 “Relationship Contracting-Principles and benefits”)

講演の概要：

Savage 氏は、「プロジェクト最適化のための提携・遂行

契約 (Relationship contracting) とは、発注者、コンサルタント、コントラクター間の関係を確立・管理し、経験と技術をもとに最適なプロジェクト成果を引き出すための柔軟なアプローチである。」と定義し、アジア地域を中心とした多くのプロジェクトの経験から、プロジェクト遂行の方法がプロジェクト最適化のための提携・遂行契約に変化していること、その中でのコンサルタントとクライアントの役割、より効果的な協力関係の確立のために必要なことなどについて述べた。この契約形態は、階層化された発注者と受注者の役割の中で、従来の業務提携 (Alliance contracting や Partnership contracting) とは連携の範囲や、責任・役割の程度に違いがあるものと思われる。

プロジェクト最適化のための提携・遂行契約の導入は、時間、コスト、リスク分散、柔軟性、技術革新などプロジェクトにおけるあらゆる面でメリットがあるとし、特に、オーストラリアでは、プロジェクト最適化のための提携・遂行契約という提携の形態が一般的になりつつあるとのことであった。

また、導入にあたっての重要なポイントとして次の2点を掲げ、今後プロジェクト最適化のための提携・遂行契約がプロジェクト達成の標準的な手法となるだろうと結んでいる。

- ープロジェクト遂行の最適な方法の決定にあたって、コントラクターとコンサルタントが重要な役割を果たすこと
- ーリスクの適正な配分が最重要であること

③ 講演者：Tony C.K. Shum 氏、AECOM、アジア局長
講演テーマ：

地球規模の課題と機会、及び世界の調達動向

(原文 “Global Challenges & Opportunities, Global Procurement Trends”)

講演の概要：

Shum 氏は、人口増加・温暖化などの影響を受けてビ

ジネスがダイナミックに変化しているなかで、国際企業と地域企業の協力、協力を通じた新たなビジネスチャンスの創出されていることを紹介した。

まず、近年の調査結果等から我々が直面している地球規模の課題を、多くのキーワードとともに示した。その内容は、人口増加、資源の管理・保全、水不足、気候変動、エネルギーといった問題から、それらが輸送・交通、地域社会に与える影響まで多岐にわたり、その課題の大きさを改めて認識させるものだった。

次に、このような課題に直面している状況の中での、新たな資金源の確保、リスク移転、能率向上・説明責任・技術革新に基づく VFM 調達、ライフサイクルコストといった側面から、公共事業の調達をめぐる動向を述べ、最近の交通関係のプロジェクトから業務提携に関する革新的な事例を紹介した。最後に、今後は技術者が重要な役割を担い、コンサルタントがリーダーシップをとるべきであると主張した。

④ パネルディスカッション

“Overcoming barriers and enhancing partnerships” というテーマで開催された初日の全体フォーラムの最後は、パネルディスカッションで締めくくられた。

パネリストは、直前にプレゼンテーションを行った Shum 氏のほか、この日のフォーラムでプレゼンテーションを行った、ADB 副総裁の Greenwood 氏、JBIC の飯島氏、Leighton Asia 社の Savage 氏の計4名で、カナダ Golder 社の Boyd 氏がモデレータを務めた。

パネルディスカッションは、参加者からの質問にパネリストが答える形式で行われたが、時間が20分程度と短かったため、突っ込んだ議論は行われなかった。参加者からは、世界銀行・JBIC などの融資機関とコンサルタントが何をできるか、PPP プロジェクトに参加するにはどうすればいいか、若者を技術の世界に呼び込むにはどうすべきか、といった質問が出された。



モデレータ及びパネリストの面々：左から Boyd 氏、Shum 氏、飯島氏、Greenwood 氏、Savage 氏

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC Directors and Secretaries Meeting
FIDIC 事務局長会議社団法人日本コンサルティング・エンジニア協会
事務局長 山下佳彦

日 時：2007年9月9日(日) 9:00～12:30
 場 所：Suntec Singapore, International Convention and
 Exhibition Center, Room 303-4
 参加者：24 カ国事務局長、(欠席) 米国、ノルウェー、ア
 イルランド
 議 長：Megan Motto, 豪州事務局長

A. 議題

1. 各国協会の現状報告
2. 事務局長会議の進め方について(議長説明)
3. ワークショップ
 - 1) 協会の適正な運営
 - 2) 政府へのロビー活動
 - 3) 協会員の増強
 - 4) 資金集め(Fund Raising)

B. 議事要旨

今年は、議長国のオーストラリアが事務局長会議の議題及び議事進行を担当し、AJCEは藤江事務局長と山下(次期事務局長)が出席した。カナダのケベック協会から、来年度のFIDIC大会の紹介を兼ね2名が特別参加された。

1. 自己紹介(各国協会の現状報告)

議題は自己紹介であったが、参加者は各国の事務局長であることから、自己紹介と共に各国の活動現況と課題などが報告された。活動現況を要約すると以下のとおりである：

- ・ヨーロッパでは、事業量に対しエンジニアや人的資源が不足しており、この関連で若手エンジニアの確保と能力開発が課題となっている。
- ・CE業界全体では、損害賠償保険の限界、協会会員とのコミュニケーション促進の重要性、若手エンジニアの教育・研修、ゼネコンとの連携促進、発注者や議会に対するロビー活動、公共事業における品質の確保(QBS)、理事会の役割と開催頻度、QBSのPR方策等、が課題として挙げられた。
- ・AJCEは理事会の定期的な開催(1回/2ヶ月)、各委員会や分科会とおした活発な活動とコミュニケー

ションの促進、日豪研修などをおした若手エンジニアの育成、FIDIC 報告会や AJCE セミナーによる協会内の能力開発や、協会外部への情報発信、公共事業調達における品確法の推進、国内外事業における AJCE の触媒としての役割等、を報告した。
 ・特記事項としては、①カナダ協会が外部(一般民衆)に対して、最良のエンジニアを選定するためのガイド(両面見開き2ページ)をホームページに紹介し、外部にも印刷物を配布していること、②オーストラリア協会が、新設したロビー活動専門部門の6ヶ月間に亘る活動成果報告が上げられる。オーストラリア協会は70%が会員へのサービス、30%がロビー活動に振り分けられている。2名のロビー活動専門職員が今年新規に採用され、契約、賠償保険、調達、職業安全・衛生等に関するロビー活動を実施している。この分野はコストが高むものであるが、十分なメリットが期待されることから、主要な大手会員企業が資金を提供している。

2. ワークショップについて

各国事務局長からの報告を受けて、議長が議題に上げられた4テーマについて討議の進め方を説明し、これを受けて4グループごとに議論が行われ、以下の結論が報告された。

1) 協会の適正な運営

- ・協会内部では、大規模企業会員と小規模企業会員との連携が重要である。大規模企業は多くの会費を支払うが、小規模企業(オーストラリアでは、96%が小規模企業)を含めたCE業界の声を政府や発注者に代表してアピールし、事業機会を創れること、小規模企業は、大規模企業の資金援助やロビー活動の恩恵を受け、自分たちの主張を反映させることが可能となっていることなどから、相互にwin/win関係を築いている。
- ・会員相互のコミュニケーション、会員を知ることが協会運営の基本である。
- ・協会は、会員活動をマスコミに周知し、コンサルティング・エンジニアがQBSの推進や最良事業の提

案者であることをPRしている。

2) 会員の増強

- ・1)と共通するテーマである。会員増強の基本は、会員相互のコミュニケーション促進にあること、品質の高いサービスを提供すること、高い倫理規定を持ち・実践すること、協会のイメージを高めること、メディアに対し透明性を強調し発信し続けること、会員資格に付加価値をつけること(厳正な会員基準: ISO9001の取得等)等が上げられた。
- ・協会のイメージ向上やロビー活動の促進を兼ねて、外部から有識者や政治力のある人材を招へいすることも検討している(オランダ協会)。

3) ロビー活動

- ・ロビー活動をととして影響力のある人・組織と定期的に面談し、長期的に良好な関係を築く。
- ・協会は、メディアに対し透明性を高め、コミュニケーションに熟知していなければならない。
- ・豪州協会はロビー活動に2名の専属職員を採用し、毎日メディアにCEのメッセージを発信している。加えて政府が抱えている課題の認識と、それに対する対策を提案している。
- ・政府の良きアドバイザーとしても活動しており、メデ

ィアに対しては適宜コメント発信する(メディアは論争を好むので、これを避けることなく論争に加わることで(開かれた協会)、メディアは相談にくるようになる。

- ・メディアへのメッセージは10～20秒程度が大半であるため、答えを発信するのではなく、伝えたいメッセージを発信するよう心がける。

・エンジニアをどのように活用できるか、我々の売り方をメディアに伝えている(カナダ)。

4) 資金集め(Fund Raising)

- ・現状の会費に加え、教育、セミナー、研修等のプログラムをととした資金集めを促進させる。

来年度の事務局会議は、9月5日(金)に終日時間を取り、南アフリカが議長を務め、ニュージーランド、フィリピンが副議長を務める。

おわりに

今年初めて事務局長会議に出席し、各国の事務局長に挨拶し歓迎されたことで、無事1年生としてのスタートが切れたのではないかと感じています。藤江前事務局長の築かれた実績を基盤に、AJCE各位のご指導とご鞭撻を賜りながら、良きリエゾンとして尽力してまいり所存です。変わらぬご支援をお願い申し上げます。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC Presidents' Meeting FIDIC 会長会議

株式会社オリエンタルコンサルタンツ 代表取締役社長
AJCE 会長 廣谷 彰彦



1. 会長会議の意義

FIDIC 会長会議は、毎年、FIDIC 本部の活動概要をそれぞれの会員協会へ伝達するための、非常に重要な場である。しかし、FIDIC 総会が毎年てんこ盛り状態で内容が充実し、また、さまざまな課題を出来るだけ議論したい意向から、会長会議の時間の確保が困難になりつつある。さらには、会員協会が増加したこともあり、当会議のあり方にも更なる工夫が必要とされる。

参加者はFIDIC本部理事、各協会正副会長等、事務局長等、などであるが、相当人数になるため、場所の確保にも窮している。そのため、最近では日曜午後に当会議が開催されるようになると共に、街の観光の時間とぶつかる様になり、大変に不興を買っている。さすがに昨年は多くの抗議を背景に時間・場所を変更したが、本

年は強行された。

これまでは、様々な情報伝達手段として、たとえば、FIDIC-GAMに時間を多く割いてみたり、あるいはPre-GAMと称して、GAMの議題を予め提示して議論させようとしたり、今回は会長会議として相当内容にかかる議論の場とした。今後とも、FIDIC本部の苦悩は続くようである。

2. 会長会議の内容概説

アジェンダを英・和で対比して、以下に示す。

内容を項目ごとに概説する。

- (1) 歓迎と次第挨拶：ホルヘ・ディアス・パディラ会長
PPTを用いて、これまでの成果を中心に報告し、今後の方向性にも触れた内容となっていた。

	FIDIC Presidents' Meeting, Singapore Sunday, 9 September, 14-17.00 Agend	F I D I C 会長会議、シンガポール 9月9日 日曜 14～17時 議事次第
1. 14.00	Welcome and introduction: Jorge D	歓迎と次第紹介：ホセ・デ・イサ・パテラ会長
2. 14.10	Key issues brief overview of key FIDIC activities - new products (contracts, PPP guide) - new services (PSM, GPIMs) - procurement/IFIs - new policies (eg conferences) - Bimilaci (Development Banks)	主たる課題報告：(エンリコ・ヴィンク専務理事) F I D I C 本部主要活動の概括 - 新規発刊 (契約書、PPP ガイド、他) - 新規サービス (事業継続管理、調達公正管理、他) - 調達/国際金融機関 - 新規政策 (例：会合等) - 隔年会議 (開発銀行等)
3. 14.40	Reports from Regions: - ASPAC - EFCA - FEPAC - GAMA	地域会議報告： - A S P A C - E F C A - F E P A C - G A M A
4. 15.20	FIDIC/EFCA TF: A report from the two presidents on the proposed consolidation of representation for the industry in Europe	F I D I C E F C A タスクフォース： 両協会の会長から、当産業の欧州における代表性の統合提案にかかる検討報告
5. 15.40	Open Forum Presidents are invited to respond to key issues and other issues sent to FIDIC prior to the meeting.	オープンフォーラム： 各協会の会長は、当会議に出された課題、あるいはその他課題にかかる議論

- － 2004年のビジョン(Engineering Our Future)に基づく活動
- － 75 会員企業、さらに増加中、世界で 40, 000 社プラスを代表
- － 毎年の総会で決議される戦略ならびに 2 カ年計画に沿った日常行動
- － 産業の代表性が重要であり、FIDIC が各地域を代表すると共に、会員企業が各国を代表。
- － したがって、FIDIC の地域組織である ASPAC (アジア・太平洋)ならびに GAMA(アフリカ)を強力に支援。
- － さらに、FEPAC (中南米地域)とも継続して協力を検討
- － EFCA (欧州連合)とは、より強力な統合化に向けて検討中⇒タスクフォース立ち上げ
- － 出来るだけ多くの地域・産業と連携効果を狙う方向

(2) 主たる課題報告：(エンリコ・ヴィンク専務理事)

2006～2007 年の FIDIC 本部における主要活動の概括が報告された。

- － 新規発刊 (契約書、PPP ガイド、他)
図書販売は、過去最高を記録した。
- － 新規サービス(事業継続管理、調達公正管理、他)
持続ある開発、パートナーリングにおけるリスク、PFI / PPP、他、様々な方向へ展開
- － 調達/国際金融機関
コンサルタントの選定にかかる国際金融機関との協議の継続
- － 新規政策 (例：会合等)
特に、地域会議等における代表制の確立などに注力
- － 隔年会議 (開発銀行等)

国際金融機関との隔年会議において、さらに幅広い課題に関して協議継続

(3) 地域会議報告：

- － ASPAC
ASPAC 報告の項で詳述予定
- － EFCA
欧州の会員企業を代表し、大変に力強い活動を継続・70 億ユーロ(約 1. 4 兆円)/年・百万人を雇用・現行の 4 委員会活動を通して、今後も協力に活動予定。
- － FEPAC
中南米市場におけるコンサルタントの存在は、選定・報酬・業慣行などに不利な点が多く、存続の危機にあるため、より一層の活動活発化が必要。
- － GAMA
新アクションプランに基づく活動・3 回/年の理事会・常設事務局設置の検討

(4) FIDIC/EFCA タスクフォース：

両協会の会長から、当産業の欧州における代表性の統合提案にかかる検討報告があった。

- － 両協会は、2004 年に協定を締結し、情報共有やコラボレーション確立に向けた検討を進めることとした。
- － しかし、具体の検討が進捗していないため、更なる活発化を図るため、合同タスクフォースを立ち上げる。
- － とりあえずの TF 委員候補として、FIDIC 側から仏・独・英・米から各一名、EFCA 側からハンガリー・スペイン・デンマーク・ギリシャから各一名。
- － 2009 年のロンドン大会では、ある方向性を出したい。

(5) オープンフォーラム:

各協会の会長は、当会議に出された課題、あるいはその他課題にかかる議論を進めた。

AJCE からは、本邦におけるコンサルタント選定方法

に、より多くの技術競争が導入されつつあり、FIDIC の協力に感謝する旨、ならびに各種アンケート調査等に、会員各協会からの協力に感謝する旨を伝えた。

特集：2007 年 FIDIC シンガポール大会報告

FIDIC Capacity Building Committee (CBC) Meeting
FIDIC-能力開発委員会

株式会社日水コン 海外事業部業務部長
国際活動委員会 CB 分科会長 桜井 一



2007 年 9 月 9 日 (日曜) 07:45 ~ 10:00

Suntec 会場 3 階 305 号室

委員会メンバー

Bayo Adeola (ナイジェリア、今期まで FIDIC 理事): 委員長

Dick Kell (オーストラリア、元 FIDIC 会長): 委員

Javad Haddad (イラン): 委員

Hajime Sakurai (日本): 委員

(欠席 John Ritchie、カナダ): 委員

(欠席 Andras Rev、ハンガリー): 委員

最初の連絡では、朝 7 時から委員会をスタートすると驚いていたが、結局 7:45 からとなった。6 人の委員のうち 2 人が欠席で、FIDIC 事務局からの出席もなく、結局 4 人での委員会となった。

議事次第としては、下記が提案されたが、結局 FIDIC の発刊している Guide to Practice についての協議が中心だった。

- ロンドン CBC 会議議事録レビュー・活動事項
- Guide to Practice のレビューと改善案
- Guide to Practice の販売と活用

- アフリカ開発銀行の調達ポリシー報告

- その他

まず、委員長から挨拶があり、続いて下記の話があった。

- * 現在の委員の人数では、重要な委員会の活発的な活動には不足している。事務局から選任者および数人の補強が必要である。今後、FIDIC 理事会と協議する。
- * 委員長の理事期間が今回の総会で終了するが、続けて委員長として続行する。しかし、本 CBC の担当理事は後日決まることになる。
- * 今後、多くのテキスト・ドキュメントを作らなくてはならないが、協力してくれる Writer を探さなくてはならない。これも、FIDIC 理事会と協議する。

Guide To Practice について、初版は世銀資金により 1994 年作成され、2003 年に FIDIC ドキュメントとして発行された。現内容は次頁のようになっている。

しかし、コンサルタント業界の現状に合わせた項目を追加し、現行の項目についても最新化する必要がある(上記右改定案を検討することとなった)。本編の中心項目に関するドキュメントが FIDIC の各委員会で発刊さ



れているが、それらを再度レビューし、本編を最新化する。また、本ガイドの内容をもっと分かりやすくするため、①ビジネスを始める前、②実施段階、③プロジェクト実施及び④その他にグループ分けすることを検討する。

本ガイドをうまく活用するには、FIDIC YPMTP (FIDICのヤングコンサルタント研修プログラム)で利用

するとか、各国MAのCBプログラムで利用する。また、工学大学での教材として利用することが考えられるが、今後、Kell氏を中心に活用方法を検討していく。

上記協議の結果、各項目ごとの改善および追加事項については、担当者を決めて作業・作成することとなった。

	現 Guide To Practice	改定案 Guide To Practice
1	<i>Introduction</i>	<i>About FIDIC</i>
2	<i>The Consulting Industry</i>	<i>The Consulting Engineering Industry</i>
3	<i>Organizing a Consulting Firm</i>	<i>Setting up a Consulting Firm</i>
4	<i>Administration and Organization of the Firm's Activities</i>	<i>Running a Consulting Firm</i>
5	<i>Business Development</i>	<i>Business Development</i>
6	<i>Human Resources Management</i>	<i>Human Resources Management</i>
7	<i>Financial Management</i>	<i>Financial Management</i>
8	<i>Client Relationship & Communication</i>	<i>Clients Relationship & Communication</i>
9	<i>Sustainable Development</i>	<i>Sustainable Development</i>
10	<i>Risk Management</i>	<i>Risk Management</i>
11	<i>Quality Management</i>	<i>Quality Management</i>
12	<i>Business Integrity Management</i>	<i>Business Integrity Management</i>
13		<i>Integrated Performance Management</i>
14		<i>Project Management</i>
15		<i>Contracts Administration</i>
16		<i>Dispute Resolution</i>

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC Integrity Management Committee (IMC) Meeting FIDIC-不正防止委員会

株式会社建設技術研究所 経営企画部次長
国際活動委員会QBS分科会長・政策委員会 河上英二



1. 日 時：2007年9月9日(日) 9:00～10:30

2. 場 所：サンテック 会議室 303

3. 議長及び参加者

議長：Felipe Ochoa

報告者：

① Jorge Diaz Padilla, Mexico：FIDIC 会長

BIMILACIでのFIDICからの報告を中心に当該委員会に関連する事項の説明がなされた。

- ・ FIDICはQualityを最重要視しているが、Qualityの認識が一致することが必要であることに気付いた。それは“sustainability”であり“project-life cycle”に関連する。
- ・ “integrity”も“quality”のひとつであり、調達の過

程で重視されるべきである。

- ・ FIDICはBIMS (Business Integrity System)を有しているが、政府を対象としたGPIMS (Government Procurement Integrity Management System)を作成した。これまでのこれに関する活動をレビューして、さらに活動を活発にする。
- ・ 特にガイドラインを有しない国を対象に、BIMSの活用を促進する。

② John Boyd, Canada：FIDIC 次期会長

社会的にも調達の透明性を求める声が強くなってきている。私たちは公正な活動を目指しているが、企業側だけの努力にも限度があり、そういった意味でも政府向けのGPIMSは有効と考える。

【委員会のTOR】

1. To work with our international partners: International Financing Institutions (IFI' s), Organization for Economic Co-operation and Development (OECD), Transparency International (TI), in the development of a demand-side Integrity Management process to complement FIDIC' s supply side efforts.
2. To assist the Executive Committee on matters related to Integrity Management and emerging international initiatives.
3. To promote the use of the Business Integrity Management System (BIMS) as the effective tool of corporate governance in curbing corruption.
4. To follow up and support BIMS training and implementation programmes among Member Association's membership of consulting firms.
5. To support the formation and effective functioning of a BIMS Users Forum.
6. To liaise, in conjunction with the Secretariat, with organizations with interest in Business Integrity Management.

- ③ Xie Shanzhang, China : FIDIC 理事
- ④ Renco G.campen, Netherlands
- ⑤ Tore Frellumstad, Norway
- ⑥ 河上

4. 他の報告事項

(1) BIMS のアンケート結果報告

前回の調査では70%の実施率が今回は75%と前進はした。実施した国は34カ国で、各国平均2～3の企業であった。日本は、中国に次いで2番目に実施企業数が多かった。ただし、中小のコンサルタント企業の実施率は25%と少なかった。結果はHPに掲載しているので見てほしいとのこと。

(2) BIMS Training Kitについて

トレーニングキットでは、幾つかのケーススタディの結果をマトリックス表に取りまとめ提供する。ドラフト段階であるため、委員会にてメールを活用した意見照会を実施する予定である。

(3) カナダのMOUについて

カナダではBIMSに独自のアイデアを組み入れたMOUのシステムを開発した。詳細については、次のカナダ大会で紹介する予定である。

(4) 本大会でのWSについて

9/12 11:00～12:00に開催されるWSについて報告

があった。

(5) 今後の活動

基本的にはBIMSのフォローアップを中心に活動を進める。委員の情報交換はメールを活用して進めることが確認された。

5. 感想

桜井さんの代わりに初めて委員会に顔を出すことになったが、会長や次期会長が参画するなど、この委員会の重要性を感じた。次からは、中国のXie理事が参画する予定である。



ERP (Electronic Road Pricing) 電子式道路通行料金徴収システム

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Business Practices Committee (BPC) Meeting ビジネスプラクティスコミッティー会議

株式会社建設技術研究所 経営企画部担当部長
技術研修委員会副委員長 金井 恵一



日時：9月9日(日) 9:00～12:00

場所：Room 310, Suntec City

議長：Gregs Thomopulos (米国)

内容：簡単な自己紹介の後、以下の内容にて3時間にわたり熱心な議論が行われた。

1. TORの見直しと確認

現在のTOR

- 1) MAからその傘下会員企業の重要関心事についての情報収集をすること
- 2) FIDICが自ら貢献できる、或いは現存する知見を取りまとめて提示できる問題を特定すること
- 3) 「ベストプラクティスガイド」などを作成し、理事会に提言すること
- 4) 諸問題の解決に最も効果的な方法を生み出すためのタスクフォースの組成を提言すること
- 5) 主要関心分野における諸情勢をモニターし、関連情報をMAに提供すること～リスクの特定と管理、保険の動向、実務管理、QBS、QMSなど

- 廣谷 AJCE 会長より、TOR の 2) の重要性について指摘がなされ、その達成のために MA とのコミュニケーションをもっと強めるべきであるとの意見で一致した。
- 多くのガイドラインが出されているが、それをどう適用すべきかについての指南がない。「ベストプラクティスシリーズ」のようなガイド作成を検討したかどうか、との意見が出された。
- Best Practice Award の創設を検討したかどうか、との意見もあった。
- 他の委員会の TOR との関連が深いものも多く、今後調整を図るべきであるとの意見が出された。
- 上記の諸意見をふまえ、「MA とのコミュニケーション」の観点を TOR に加えることとし、修正案を議長が作成の上、メンバーにコメントを求めることとなった。

2. 今後推進すべきプロジェクトについて

- 現在推進中の「Definition of Scope」についての説明、質疑のあと、今後のプロジェクトに関する議論があり、その中で QBS に関する討論が熱心に行われた。QBS を推進するためには、発注者側の理解を深め、発注者が QBS を実施するための体制を支援することが不可欠であり、そのためのツールが必要との声が大勢を占め、No.1 プライオリティーのプロジェクトとして取り上げることとなった。
- その他のプロジェクト候補としては以下があげられるが、MA の意見も聞いた上で優先順位をつけることとなった。
 - ・ Best Practice of Selection
 - ・ Best Practice of Fee Development
 - ・ Disaster Management
 - ・ Design for Safety in Construction
 - ・ Series of Best Practice (Library)
- それぞれのプロジェクトの提案者がメモを作成しメンバーに回付する。
- 当コミッティーに MA が何を求めているのか、Survey を行う。

3. 他の委員会等との連携・調整

- 上記 1. で提起された他委員会との連携・調整については、下記の委員会を対象にリエゾン担当者を決めてコミュニケーションすることとなった。
 - ・ Risk Committee
 - ・ Contracts Committee
 - ・ Sustainability Committee
 - ・ Integrity Management Committee
 - ・ Capacity Building Committee

4. 最後に

- Thomopulos 委員長より、FIDIC における当委員会の重要性について言及があり、熱心な議論への謝意とともに、今後一層の積極的な参画の要請がなされて、閉会となった。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Sustainable Development Committee (SDC) meeting 持続可能な開発に関する委員会



株式会社東京設計事務所
東京支社 下水道グループ グループマネージャー
技術研修委員会 FIDIC Policy 推進分科会長 狩谷 薫

日時：2007年9月9日（日） 9：00～12：00
場所：Suntec Singapore International Convention and
Exhibition Centre, Room 311
参加者：Chair: William Wallace
Iksan Van der Putte, Jacob Lipa, John Boyd
狩谷薫、春 公一郎：AJCE

Sustainable Development Committee (SDC) は、委員長であるビル・ウォレスが準備した議事次第及び事前に配布されていた「顕著な持続性成果を達成するためのエンジニアリング設計プロセス」と題された白書の下書きに基づいて行われた。今回の会議では、2004年のコペンハーゲン大会で発刊されたPSMガイドラインに基づいた数回のセミナーでの受講者からの反応等を踏まえて、PSMの普及と持続可能な成果を達成するための方策を中心に議論がなされた。

1. PSM (Project Sustainability Management) ガイドラインを取り巻く状況

a. PSM セミナーやその適用した事例からの結果

- コペンハーゲンでの発刊以来、世界の12ヶ国で発表やセミナーを行ってきておりガイドラインの販売部数は数百冊に達している。
- オーストラリアのセミナーから、「意思決定過程への関与が重要」、「実務においては、技術革新が重要視されていない」等の意見が出された。
- 課題は持続性を達成するために、いかにそのような状況に辿り着くかが課題である。
- 理事会では、委員会を拡張する方向を進めている。
⇒ 建築界では各種のマネジメントの統合化を進めているとのコメントがあった。

b. 改訂等の必要性

- PSMを業務調達要件に含むことが必要である。
- 持続可能な設計手法の確立が必要である。
- プロジェクトを持続可能とするために、ベンチマークや指標の明確化が必要である。
- 明確なデータベースが必要であるが、作業量は非常に大きい。

- FIDICは顧客に対してメッセージを送り続ける必要がある。理事会では、PSMを普及させるために、契約への盛り込み、衝撃的な影響、ビジネス慣習の転換を図り、すべての関与する人々の関心を再喚起する必要性が議論された。
⇒ 改訂は良いが、トレーニングマニュアルの作成も是非必要であるとの意見があった。

2. PSMに関する白書に基づいた議論

理事会等の意見を受け、持続可能なプロジェクトを調達するための新たなビジネスモデルの必要性が議論された。ビジネスモデルには、次のような7つの構成要素が必要だとの説明があった。

- 持続可能性の目標、目的及び数値設定の枠組み及びプロセス
- 博識で、協働する高い実績を有するチームの調達プロセス
- 新規のより持続可能な技術を費用効果的に適用するプロジェクトマネジメントプロセス
- 総合的 (holistic) な解決策を想像し、設計し、調達するためのツール及び方法論
- 総合的な解決策を可視化し、モデル化し、シミュレートするためのツール
- 持続可能性成果を維持し、高めるためのツール
- 共有化されたプロジェクトモデルに対するすべての関係者の高レベルの傾倒

FIDICがどのような方法ですべての利害関係者を集結させるかが、重要であるとの認識を確認した。FIDICの契約委員会は、物事をその実績を見て後追いの見方をするので、留意が必要であり、当面は国際金融機関との協働委員会を設置する案も検討する必要がある。パートナリングのような形態のプロジェクトが目立っている(オーストラリア等)が、その際に顧客の視点に立った取組みが必要であり、CEは他の参加者より知識を有する部分もあり、コントラクターでなくとも、その業務に参加しうる。PSMの中にはプロジェクト・マネジメントが組み込まれていなければならない。

ISOにも持続可能性に関する取組がなされており、こ

の活動に注目すべきであるが、指標値設定プロセスをも合わせ持つFIDICのPSMは優位にたてると考えられる。

委員長より、持続可能なプロジェクトの推進とPSMの普及に向けて、SDCの拡張案が示された。

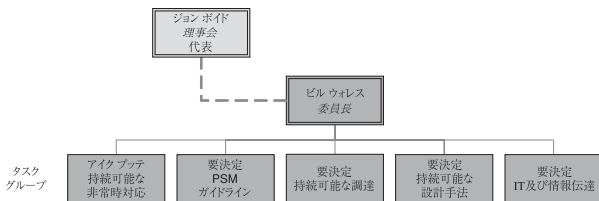


図1 FIDIC SDC (持続可能な開発委員会) 組織

上記の各タスクグループを運営してゆくために、15-20人程度の委員が必要であることから、委員の勧誘方法に関して議論がなされ、これに関しては委員長とジョン・ボイド氏らで協議をすることとなった。各タスクフォースの議長の選定が重要との意見が出された。

この議論に関しては、各自が気付いた意見・追加事項等を委員長に送ることとなった。

3. その他の意見

- 建築界では、500にも及ぶ指標値と、LEEDやBREEAM等の持続可能性に関する多くのシステムが存在し、多種多様な分野・顧客が係わっているので関係を保っておく必要がある。
- PSMを普及させるために、UN/ISDR (国連国際防

災戦略)、世界銀行、ISO、ICC (国際商工会議所)、USGBA (US Green Building Council) 等との接触を密にするべきであるし、関連するセミナー (例：海岸開発に関する会議等) への参加・発表もする必要がある。

- 今後、FIDICはPSMビジネスの最前線にいる必要があるし、持続可能性を契約約款に含むべきかをも検討してゆく必要がある。

4. 日本での取り組み

- 日本では、顧客の意識の中に持続可能性をプロジェクトに組み込むといった意識が低いため、JBICや国土交通省への説明等を進め、その後セミナー等を開催し、更に普及させるような方法が望ましいとの意見を提出した。
- 日本では、一般的に基準等をクリアすることを対象に設計がなされている。このような状況で、PSMで継続的に持続可能性を高めることが可能なのか不明である。また、適用事例が少ないため、具体的な業務への適用方法が明確でない。このため土木事業等での事例を含めて、PSM適用事例のショーケースを充実するよう要請した。
- 今後、FP推進分科会においては、FIDICの動きへの対応とともに、国内顧客用のPSM説明資料等の作成を含め、その普及促進に向けての動きを進める必要がある。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Business Practice Workshop : Project Sustainability Management(PSM) Pays

ビジネスプラクティスワークショップ：持続可能な開発はペイする

株式会社日水コン 東京下水道事業部技術第一部部长
政策委員会副委員長・技術研修委員会幹事 春 公一郎



日 時：9月12日(水) 11:00～12:00
場 所：Suntec Singapore 301-2
議 長：Bill Wallace (アメリカ・FIDIC SDC Chair)

1. はじめに

本ワークショップでは、FIDIC Sustainability Development Committee (SDC) のチェアをしているWallace氏より、Project Sustainability Management (PSM)に関する講演がなされた。

2. 講演概要

(1) FIDIC PSMの意義

- 持続性を確保することは、現実的かつ喫緊の課題。世界中のインフラを完全にオーバーホールし、よりサステナブルな技術、システムに置き換えていく必要がある。これは、プロジェクト毎に対応していく必要がある。
- このような背景から、FIDICは2004年のコペンハーゲン大会で「PSMガイドライン」を発表、FIDIC PSMの普及に努めているところである。PSMとは、プロ

ジェクトごとに環境管理を行うという概念で、Sustainabilityに関わる目標を、社会面、経済面を含めて設定し、達成度管理を行う点が特徴となっている。ガイドラインでは、46のコア・インジケータが設定されている。

- PSMの普及のため、SDCでは各国でのセミナー開催を行っているが、年々関心が高まっている状況にある。一方、コンサルタントに仕事が発注される段階では既に業務内容が決まっていたりどうしようもないなど、疑問／課題が寄せられている側面もある。

(2) エンジニア及び社会にとって重大な懸念

- ① 現在の経済発展は持続的でない
利用可能な資源や環境容量には限界があるが、それを超えつつある。
- ② このままではすぐに(約20年)で危機的状況に達してしまう
希少資源の探査に乗り出す人は年々増え、対処できるような組織もない。
- ③ 持続性の問題は、ビジネスや政府の方法を変えつつある
市民は地球環境破壊によりもたらされる結果を認識しつつある。と同時に、対策の実現を可能とするイノベーションが切望されており、新たなビジネスが生まれつつある。
- ④ エンジニアがリードして状況打破すべきだが、今はそうっていない
エンジニアはヒエラルキーの底辺(プロジェクトの意思決定フローの最下流)に位置しており、提案がなかなかプロジェクトに反映されにくい構造にある。
- ⑤ 他業種の脅威
会計士や建築家、あるいは顧客ですら、この新たな機会をビジネスにつなげよう、エンジニアには任せられないと考えているおそれがある。

(3) コンサルティング・エンジニアが関わっていく方法

- ① エンジニアの役割認識
 - SDに関わるビジネスケースについて理解
 - 現状を永続させない
- ② 持続性確保に不可欠なプロセスやツールの開発／活用
 - 7つの段階(次節)
 - PSMガイドラインはその第一段階
- ③ 持続性を引き上げるようなプロジェクトの調達
 - 持続性に貢献できる技術

- ハイレベルなチームの活用
- イノベーション環境の創造を支援

(4) 進むべき道

7段階の階段を上り、ヒエラルキーの上位へ。

- ① プロジェクト持続性に係る目標／基準を設定するための枠組みとプロセス
- ② 持続性の高いチームを選定するような調達プロセス
- ③ 持続性に係る課題をビジュアル化するようなツール
- ④ 包括的ソリューションを提供するためのツール
- ⑤ 経済的に持続性の高い技術を適用できるようなプロジェクト・マネジメント・プロセス
- ⑥ 持続的発展を維持／強化していけるようなツール
- ⑦ 政策に係るハイレベルな組織的関与

(5) FIDIC SDC の予定

- 災害マネジメント及び緊急時対応に係る課題について継続的検討
- PSM ガイドラインの改訂
- SDに配慮した調達プロセスの開発
- 包括的ソリューションを提供するためのツール及び方法論の開発
- 鍵となる組織との関係強化と支持の取り付け

3. おわりに

FIDICの年次総会は業界の抱える課題を扱うコンファレンスであるが、そんな中で、唯一技術色を持つワークショップであった。サステナビリティは、この10年ほどの間、大会のキーワードとしてもはやされてきた感があったが、それが昨年ブダペスト大会で忽然と消え失せ、どうしたことかと訝っていたところ、今回の再登場とあいなった。温暖化対策は一進一退の歩みを続けているが、大仰に言えば世界を救うキーは技術であるという講演者の信念、熱意が感じられた。

講演後のディスカッションでは、「あと20年で破局」とか、大会初日のフォーラムでも紹介された「2015年に東京の人口は3,600万人になる」といった少々怪しげな将来予測に対して物言いがついたものの、PSMの普及に関しては「規制当局に対してプッシュすべき」「貧困のようなヒューマン・アスペクトを組み込むべき」「地域との関連性を組み込むべき(地域的サステナビリティ)」といった建設的意見も交わされ、今後のSDC活動へのよいインプットとなったと思われる。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC Risk and Liability Committee (RLC) meeting
リスクと責任に関する委員会株式会社日水コン 河川事業部 副事業部長
国際活動委員会副委員長 蔵重俊夫

日 時：2007年9月9日 10：30～12：00

場 所：シンガポール、サンテック国際会議場、3階会議室305

議 長：Kevin Corbett, Faber Maunsell, UK

委 員：Keith Lonsdale, Berrymans Lace Mawer, UK

Malcom Padayachee, Glenrand MIB, SA

Nora Fung, ACE, UK

Steve Bamforth, Griffith & Armour, UK

Steve Jenkins, Connel Wagner, NZ

Toshio Kurashige, Nihon Suido

Consultants.Co.,Ltd., Japan

EC オブザーバー：Flemming Pedersen, Rmbol, Denmark

Adam Thornton, Dunning Thornton, NZ

昨今の一層複雑化するプロジェクトを取り巻くリスク事情の変化を考えたとき、リスク・マネジメントは業界の取り組むべき大きな課題として、その重要性がますます増大していることから、リスク・マネジメント・フォーラム(RMF、Risk Management Forum)は、リスク&ライアビリティ委員会(RLC、Risk and Liability Committee)へと発展的に改組され、今回、第1回目の会議が行われた。

1. TORの確認

Terms of Reference

To identify significant issues impacting on risk and liability for the consulting engineering industry, and formulate strategies to address these.

To monitor professional liability conditions and insurance world-wide and periodically report significant trends to the Executive Committee.

To monitor world wide and report on contractual trends, client risk mitigation strategies and legislative frameworks.

To develop relevant best practice tools and guidelines on risk management, liability and insurance.

To assist the Secretariat in establishing Task Groups as required and monitor their work for final recommendation to the Executive Committee.

To liaise with other committees through the Secretariat concerning these matters.

TORの確認がなされ、特にECとの連携が強調された。また、今回のフォーラムから委員会への再編は、RMがadditionalではなく、それ自体がissueであるという見解にもとづくものであるという説明がなされた。

2. Risk Management Implementation Guideline
(南ア協会)の紹介

同資料の紹介がなされ、ACEのガイドラインをベースとして策定されたようであるが、非常にハンディで内容的にも理解しやすい構成となっている。

第1部 Risk Managementのガイダンス

第2部 業務の各段階でのリスク管理のヒント

第3部 潜在的リスクに対する対策一覧表

3. Risk ワークショップのシナリオについて

9/11のWSの進め方について、議長からのシナリオ提示があり、了解された。すなわち、まずGoalとしてリスクを管理する際のフレームを示し、次いで問題点の提示、そして結論としてRisk管理の今日的重要性を示唆し、フロアを巻き込みFIDICの役割まで議論していくこととなった。

4. ハンガリー大会でのWS成果について

慣習法や市民法による法体系秩序を有する先進諸国では同一の土俵でRMの議論が可能であるが、途上国でどう展開していくかについては課題であり、意識喚起も必要と合意された。

5. Draft Risk and Liability Paper by Steve Jenkins

NZのSteve Jenkinsのペーパーは、リスク管理上の問題点を広範に示したものであり、FIDIC-ECで一読した結果、指摘された多くの問題点はビジネス実践(Business Practice)上の問題であり、当該委員会での独自の切り口があっても良いと思われるとするECの見解がFlemming Pedersenより示された。

6. 他の委員会との連携について

当委員会は、あらゆる委員会と関連しており、実際、

円滑な連携は困難な面もあるが、出来るだけオブザーバー参加等を考えていくこととなった。また、メールを活用した他委員会の情報についてもEC経由での回覧を検討することとなった。

7. 今後の活動方針

EC側からは、Documentの作成を強く求められた。RMの現行マニュアルをレビューし、洗練し、より実用的なものしていく方向が確認された。また、事例が重要なので、E?surveyをしていく方向が確認された。骨子に関しては、議長が作成することとなった。

大会後、議長から届いたメールによると、現行のRMマニュアルの改定は、全体を4つのパートで構成し、どこからでもFIDICコントラクトを参照出来るように配慮されるようである。

Part I : Risk Management のイントロダクション

Part II : Risk Management の一般的ガイダンス

Part III : ケース・スタディとRMシナリオ

Part IV : 紛争発生時の解決に向けたガイダンス

あわせて、無限責任に対するFIDICポリシー・ステートメントの策定も近々に対処することになっている。

8. おわりに

以前のRMFでは、保険関係を主体とした議論が中心であったが、今後はより広範なエンジニアの実務に近いところで議論がなされるものと期待している。委員会では、近々にRisk Management Surveyの実施をMAに協力要請する予定であり、そのときには会員企業のご協力をお願いしたい。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Business Practice Workshop : Winning with Business Integrity Management System (BIMS)

ビジネスプラクティスワークショップ：公正管理システムで勝利

株式会社日水コン 河川事業部 副事業部長
国際活動委員会副委員長 蔵重俊夫



日 時：2007年9月12日 11:00～12:00

場 所：シンガポール、サンテック国際会議場、
3階会議室303-4

議 長：Felipe Ochoa, FOA Consulting, Mexico

講演者：Renco G Campen, DHV Group, Netherlands

John Ritchie, Hatch Energy, Canada

Tonny Jensen, COWI, Denmark

1. イントロとBIMSアンケート結果の紹介 (Felipe Ochoa)

まず、議長のOchoa氏より、BIMSのこれまでの動向と現状に関する簡単な紹介と、今夏に実施された、FIDICの加盟協会アンケート調査結果についての説明がなされた。

(1) BIMSの動向と現状

- (1) 1977年にFIDICの汚職撲滅に関するポリシー宣言がなされた
- (2) 2001年にBIMSが発表され、その後、幾つかの会社で試験導入された
- (3) 2006年には、GPIMSがECに提案され、本年のBIMILACIで紹介された
- (4) 世銀を中心に本年11月にGPIMSに関するWG

が発足予定

(2) BIMS アンケート

- 2002年に試験導入した5社から、2005年には50社、2007年には75社がBIMSを導入済み、もしくは、導入中である
- 現時点で、南ア31社が最高で、日本7社、デンマーク5社、ドイツ4社、中国4社と続く

(3) 今後のIMCの活動

- コンサルタント、クライアントが共通して活用できるシステムの開発
- WBとのWG活動

2. BIMSに関する最近のトピックス (Renco G Campen)

(1) 中国トレーニングセンターにてプレゼンの実施

- IMSは費用、時間、労力を費やすが、経営的な勝利を得るツールである

<プレゼンの要点>

- ① 公正確保に向けた長期間の努力の必要性
- ② 関連部所間の開放的な連携の必要性
- ③ 恒常的な改善の必要性
- ④ 透明性が成功の鍵

⑤ 多くの国々との協同の重要性

(2) QMI (Quality Management Institute) との MOU 締結
BIMS の認証機関としてふさわしい QMI と本年 4 月に MOU 締結

<主旨>

- CE やクライアント向けのトレーニングの共同開催
- QMI の業務監査資格認定プログラムにおける BIMS の導入
- QMI の認定サービスを調達する FIDIC メンバーに対する効率化プログラムの開発
- BIMS 認定事業の共同マーケティングの推進
- BIMS ガイドライン類の開発

3. Hatch Energy 社での BIMS

Hatch Energy 社はカナダの CE 企業であり、社員 1000 人程度の公共セクターからの受注を中心に、エネルギー関連のコンサルティングを行っている会社である。

(1) BIMS の導入 2003 年

(2) BIMS の構成

① IM - 01

Hatch Code of Conduct Administration (行動指針管理)

② IM - 02

Hatch Energy Business Integrity Management System - Project Audit Procedures. (業務監査システム)

③ IM - 03

Selection and Engagement of Representatives and Subconsultants in Foreign Countries (海外代理店及びサブコン会社の選定と契約)

④ IM - 04

Personal Conflict of Interest (個人的 COI)

⑤ IM - 05

Appropriate Funding of Overseas Client Visitors (海外クライアント訪問時の適切なもてなし)

- (3) 対象腐敗行為 ① Bribery ② Collusion ③ Fraud
④ Extortion ⑤ Conflict of Interest

4. COWI 社の BIMS

COWI 社はデンマークの CE 企業であり、社員 3800 人程度の総合エンジニアリングの国際企業であり、40 % の受注がスカンジナビア以外からとなっている。

(1) COWI - BIMS のドキュメント構成

- Code of Conduct (行動指針)
- BIMS Policy (BIMS 基本方針)
- Corporate Practice (企業活動指針)
- Cases and Dilemmas (悩んだときに開くガイドブック)

(2) 行動指針 - FIDIC モデルを導入

(3) BIMS 基本方針 - 2 つの非常に短い文章で定義

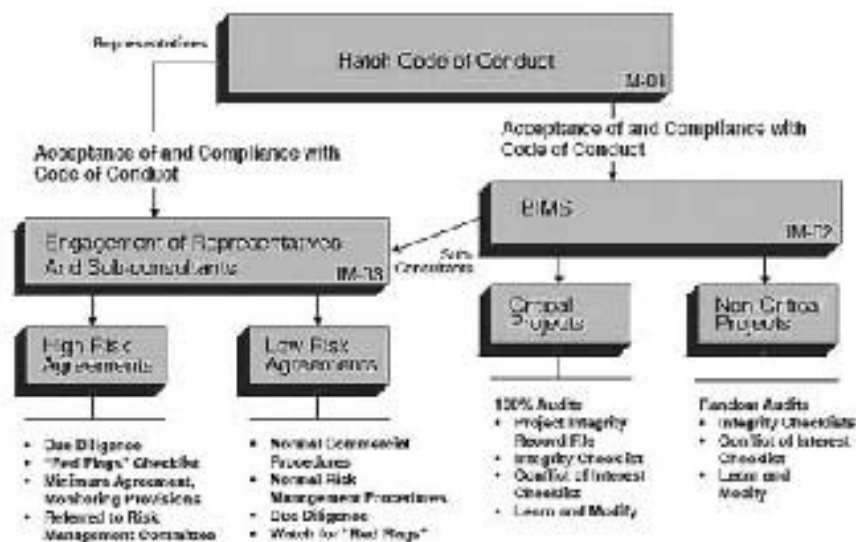
(4) 企業活動指針

(5) 悩んだときに開くガイドブック (Case & Dilemmas)

- 贈り物などの許容範囲など、灰色部分の行動に対する判断についてのガイドブックを策定

5. おわりに

BIMS の導入社数で我国が世界第 2 位であることに良い意味で驚かされた。しかしながら、わずか 7 社であり、新 FIDIC 会長 J.Boyd 氏の就任スピーチでも、残念ながら BIMS の導入会社がまだまだ少ないことに失望したというコメントがあった。BIMS に対する MDB 及び JBIC をはじめとする我国の ODA 実施機関の関心も高く、BIMS 導入の先進国として国際的なプレゼンスを高めていくチャンスと捉え、紹介・普及活動を進めていきたい。



システムの全体像

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC-Young Professionals Forum (YPF) Steering Committee Meeting

FIDIC-若手専門職フォーラム 運営委員会

Future Leaders Workshop 将来のリーダー ワークショップ

Young Professional Open Forum 若手専門職 討論会

株式会社日水コン 下水道事業開発部 担当部長
技術研修委員会幹事・国際活動委員会 秋永 薫児



1. FIDIC-Young Professionals Forum (YPF) Steering Committee Meeting

9月12日12時より行われたステアリングコミッティ(SC)ミーティングには、新旧メンバー及び私を含めて10名がテーブルを囲み、加えてSkypeにより3名の参加があった。今年の改選は3名の交代、4名の新規メンバーで行われ、メンバーは10名となった。Chairは昨年同様、Richard Stump氏(米国)で、新SCメンバーは次のとおりである。

番号	氏名	国	備考
1	Richard Stump	米国	Chair
2	Alex Eyquem	英国	
3	Nader Shokoufi	イラン・イスラム共和国	
4	Michela Diracca	イタリア国	
5	Saul Martinez	オーストラリア国	
6	Liu Luobing	中国	新規
7	Prashant Kapila	インド国	新規
8	Michele Kruger	南アフリカ共和国	新規
9	Leon Botham	カナダ国	新規
10	Rick Meynen	オランダ国	新規

会議は自己紹介とSCの組織、過去の活動などについて、議長のStump氏が説明を行い、議題は、今後の活動内容、FIDIC大会午後のYP関連日程について確認され、新メンバーからの質問に議長が回答した。今後の活動の焦点は、FIDIC大会前にYPに対していかに活動の情報を伝達し、ネットワークを広げていくかであった。ニュースレターの発行もすでに行っているが、配布先は限られている状況とYPMTPとの関連およびFIDIC事務局との連携をどうして行くかについても議論された。YP Open Forumについても北京大会から行っていて、まだ改善していく余地がたくさんあり、今後のアイデアからよりいいものを作っていくことで、意気が上がった。YPネットワークに関して、来年はメンターの交代があるので、YPFとYPMTPのネットワークをつかさどる役目を提案するいいタイミングであると提案した。SC設立当初には各委員会にYPを配置する計画もあったことを伝え、今後の活動における参考にしてもらった。

11月までにYPのためのBusiness Planを作成し、FIDICに来年ケベックでの活動内容として提示し、議論を進めながら実施に向けて準備を進めることとなった。

Skypeによる会議は毎月行うこととなり、SC新メンバーによる最初の会議は10月11日と予定された。

2. Future Leaders Workshop

FIDIC YPMTPの研修生がその7ヶ月の研修成果を発表する場所として提供されており、それを元に会場内で討議が行われた。今年の研修トピックスは

- 1) Organization and Human Resource Development
- 2) Ownership Structures
- 3) Marketing of Consulting Services
- 4) Multicultural Management

であり、35名の研修生は地域をベースにチームは3つに分けられて、それぞれで研修が行われた。FIDIC大会開催3日前から集まり、バーチャル討議の結果を元に、さらに全体としての討議とまとめを行い、メンターからもらった意見、提案などを参考にこのワークショップ当日まで発表用資料の作成に時間を費やしていた。

研修生から代表の一人が司会をし、その他4人の発表者により、

- ① Sustainable (持続可能性－経済と環境)
- ② People (人々－人材)
- ③ Market (市場－業界)
- ④ Corruption (腐敗－文化・習慣)

と題して研修成果をまとめ、彼らの考えを発表した。各自10-15分程度の短いものであったが、膨大な議論と報告書の内容からポイントを絞り、発表していたことが伺えたが、単純明快でわかりやすい反面、主張がいまひとつ見えないところがあり、戸惑いや意見のまとめが難しかったことを窺わせた。発表の中で、Sustainableであるためには、経済、環境、歴史、文化への配慮、世代間で引き継がれる公平性とプロジェクトへの責任が必要であること、Peopleについては、エンジニア不足が世界的に深刻であり、YoungとExperienced(経験者)、会社－業界－協会のパートナーシップ、仕事と生活のバランスや仕事の成果を通して得られる名声についても人材を確保していく大事な要素であるとしていた。Marketについては、業界としての活動にはTrend Watchingが大事であり、Tailor Madeであるこの仕事にとって、品質と

価格のバランスのとり方が難しいということ、社員は目でであり耳であるので、よく聞き、話し、ネットワークを持つことが大事であるという内容である。Corruptionについては、FIDICの進めるBIMSや教育、意識、倫理などが挙げられており、腐敗を行っていないことの誇りを持つことが肝要である、ということに行き着く。

いくつかの質問が出たが、その中で、ストーリーテラー、方向性を示すという点で議論がされ、将来の姿やあり方についての意見が出された。明確な結果や答えを求めているわけではなかったが、与えられたテーマの検討を通じて、数人からのコメントが出されていた。そのほか、Corruptionについて、メキシコの方から実態は提示されたようないろいろなマニュアルや倫理規定などが存在し、適用されているがうまく言っていない、しかし、発表で示した最後は「人」である、という点には強く賛同した、というコメントが寄せられた。

最後に、オーストラリア協会から、小学校に配布（販売？）しているCEの宣伝DVDを短く編集したものの上演が行われた。エンジニアの紹介、その仕事ぶり、建設された施設などの紹介がされ、なかなか面白いものであった。一般市民へのCEの宣伝、啓蒙活動をすでに行っていたオーストラリアに改めて敬意を表した次第である。

3. Young Professional Open Forum

YPFの議長であるRichard Stump氏より、一緒にグローバルなYPのコミュニケーションを作っていこうとの挨拶があり、シンガポールのYP代表者たちに感謝の意を示した。このOpenForumはYPの自由な討論の場所でもある。3人の講演者の発表に先立ち、YPFのSCについて紹介と説明があり、YPMTPの指導を行ってきたSteen Frederikson氏へのねぎらいと、2004年のコペンハーゲン大会から続いてきたネットワーキングについてこれまでの努力と成果について、報告した。

講演は①南アフリカのYPF活動、②オランダのYPF (Yonri) の概要、③イランのYPFのこの2年間での活動報告が行われた。

南アフリカのYPFでは、ゴルフ大会や音楽会などのさまざまなイベントとあわせて活動しており、YPFのニュ

ーズレターの発行、セミナーなど活発である。南アフリカでは、急速な建設業界の成長、世代間のギャップ、若手技術者の質の低下などの問題があり、学生との交流、メディアの利用、記念日や記念週などの設定といった対応をしている。地区の委員会、会員のデータベース化、メンターシップ制による指導にも力を入れている。

オランダの協会では、322人のYPが登録され、ニューズレター等を受け取っている。若い世代はシニア世代に比べ個人主義的であり、インターネットによるコミュニケーションを得意としている。この状況からGeneration Learningや社内、業界内へのネットワークを広げていこうとしている、と報告された。YPFへの参加の利点として、ほかのYPやシニアとの戦略的な活動やニュートラルな分野での他社との交流が行われることをアピールして、会員増強、ネットワークの拡大を図っている。

イランでは、1972年に設立されたイラン協会の中に、2004年にYPFが組織され、急速な発展と活発な活動を行っていることが報告された。彼らはYoung Managersと称して、意見交換や技術のみならず科学の知識も増やそうとセミナーなどを行っている。これまでのセミナーでは、宇宙技術、労働法、人材育成、持続可能な開発といったことをテーマにした。また、FIDICのPSM、White Bookの翻訳や協会誌への投稿もしている。そして、協会の本体との協同、関係を強め、国内外における活動の場を広げようとしている。今年5月に開催された国際セミナーは2日間に亘り行われ、80名程の参加者があり、海外からは私（秋永）が講演者として参加し、3つのプレゼンを行い、2つのワークショップに参加した。現場見学会の企画や今年イランからYPMTPに4名が参加し、YPFのSCにも代表者が参加していることも報告された。今後も更なる活動を予定しており、国際セミナーの2回目も計画され、国外との交流もより活発に行いたいとしている。

講演後、参加者との意見交換が行われ、オーストラリアやスウェーデンからの参加者からもそれぞれのYP活動について報告などがあつた。また、FIDICの作成しているキットの活用についても、今後の課題として提案された。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC Young Professional Management Training Programme (TPMTP) FIDIC - 若手専門職マネジメント研修プログラム

株式会社オリエンタルコンサルタンツ 国際事業部
中島 剛



1. プログラムの目的

将来のプロジェクトマネージャー育成を目的として、コンサルタント業界が抱える課題およびその対応策について各国の若手エンジニアと意見交換し、企業及びエンジニアとして今後進むべき方針を取り纏め、コンサルタント業界の今後を担うエンジニアとしてのメッセージを発信する。

2. プログラムの概要

○ 参加者数：35名(アジア、アフリカ、オセアニア、中東、ヨーロッパ約20カ国より)

○ プログラムの内容

● Web上でのディベート：

参加者が3つのグループに分かれ、半年間に渡り下記4つのテーマについて意見交換を行った。

Case1：組織・人材開発

Case2：所有構造

Case3：マーケティング戦略

Case4：グローバル化、異文化への対応

● FIDIC総会でのプレゼンテーション：

総会開会前の3日間、参加者一同が介し、上記webディベートの内容および企業、エンジニアが今後進むべき方針を議論、取りまとめを行い、総会の“Future Leaders Workshop”においてプレゼンテーションを行った。

3. プログラムを終えて

半年間に渡り、活動する地域も文化も異なるエンジニア

アたちと意見交換を行ったが、エンジニアリングカンパニーが抱える問題については世界共通する点が多く、各国エンジニアとも人材開発の方策、組織の効率化、外部委託によるコスト縮減、企業イメージの向上など、課題への取組を進めていく必要性を強く認識していることが把握できた。また、すでにヨーロッパや中東などではプロジェクトの国際化が一般的なものとなっているのに対し、日本企業のグローバル化への取組は、コミュニケーション能力の問題もあり、かなり立ち後れていることを改めて実感させられた。他方、これまでのODA案件等の実施により、特にアジア地域において日本の技術は高く評価されているというのも事実であり、中東など成長する国際市場に参入していくためにも、優れた技術をベースに各企業が海外に業務展開していくことは急務であると感じた。

プログラムを通じ、様々なテーマについて意見交換がなされたが、グループ全体としての共通認識は、エンジニアリングカンパニーの財産は技術者であり、有望な人材をより多く集め、いかにその能力を伸ばしていけるかが今後の建設コンサルタント業界にとって重要である、ということであった。その点で、日本国内における建設コンサルタントの地位、イメージは決して高いとは言えないというのが現状であるが、組織構造の効率化を進める等により、人材開発・育成の促進や企業のブランド化や有効な宣伝活動を実施し、過酷な労働条件、低賃金、不正体質などネガティブイメージを払拭して魅力的な業



大会前のディベート



出席者たちと共に

界イメージを作ることが、業界全体の活性化に繋がっていくものと考えます。

当プログラムを通じ、各国からの参加した同世代の技術者と、それぞれの実状、課題、悩みなど生の声を聞くことができたこの機会は非常に有意義であり、この

経験を国内の技術者と共有することにより、コンサルタントのステータス向上、グローバル化への活動に取り組んでいきたい。また各国との情報の共有、ネットワーク強化を図るため、当プログラムへのエンジニアの派遣が継続的に実施されることを願いたい。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

**Workshop 1 : New market opportunities
ワークショップ1：アジアにおける新たな市場の可能性**

株式会社オリエンタルコンサルタンツ 社会環境事業部
国際活動委員会 ASPAC 分科会 **渡津 永子**



日 時：2007年9月11日

場 所：Suntec 301-2 会議室

議 長：Geoff French

話題提供者：Moh Wung Hee, Peter Chan, Kiran Kapilla



1. ワークショップ概要

経済成長著しいアジアは、コンサルティング・エンジニア(CE)にとって魅力的な市場である。世界各国のFIDIC協会メンバーにとって、この新しい市場にどう参画するか、現地のクライアントやCEとの協力体制をいかに築いていくかを探ることが、本ワークショップの目的である。

今回は、シンガポール、中国、インドからの話題提供者を迎え、各国におけるCE市場の動向や、現地CEとクライアント、海外企業との連携における課題等について紹介された。これらを受けて会場全体で意見交換を行った。

2. 話題提供者 講演概要

タイトル1 "Partnering in Action"

講演者 Moh Wung Hee (Director, Best Sourcing, Public Utilities Board, Singapore)

プレゼンテーションでは、関係者間のパートナーシップ構築の上での課題とその解決に向けた方策について、Public Utilities Boardの事業例を紹介しながら説明した。

パートナーシップの構築の上での課題と方策として以下があげられた。

- ① リスクの適正分配
- ② クライアントを含む関係者間の密なコミュニケーション(意思決定、活発な議論)
- ③ 法的な枠組み
- ④ 相互理解、信頼関係の構築

海外企業が多数参画する大規模事業においては、「密なコミュニケーション」と「信頼関係」の重要性が度々強調されていた。

タイトル2 "Realities of providing consulting services in China Mainland"

講演者 Peter Chan, (Scott Wilson Ltd, China Div.)

プレゼンテーションは、改めて中国市場の大きさ、可能性を感じさせるものであった。海外企業が進出する上でのポイントとして以下の点があげられた。

- 海外企業が進出する上でのアドバンテージは、技術はもちろんのこと、体系的で柔軟なサービスの提供、倫理観、海外での経験などがあげられる。
- 海外企業の進出は進んでいるものの、その役割は専門的アドバイスなど限定的である。今後は一層海外CEと現地CEの競合が進むと思われる。(中国CEの国際化が進む)
- 今後の課題としては、WFOEやJV方式など事業実施方法の整備、税や労働基準の整備、調達方法、設計プロセスや基準の違いなど(チャンスとも言える?)

- 地理的・文化的な多様性に対し「相互理解」と「適応能力」が重要か

タイトル3 "Realities of appointing Consultants in Emerging Markets of Asia "

講演者 KK Kapila (Vice President Consulting Engineers Association of India,)

中国と並んで注目される地域であるが、海外CEが進出する上での課題は異なるようである。

ポイントとして以下の点があがった。

- 英語を話す若手技術者が多いことをはじめ、海外CEを受け入れる下地はできている
- 今後はインフラ整備、衛生、教育、農業分野に資本が投入される見込みである。しかし大規模事業に際して、クライアント、現地CEともに、技術、資金、工程管理等の認識が不足している面がある。海外CEとのJVの必要性が指摘されている。
- 国際資本による事業では、QCBS、QBSによる選定が一般的であるが、インド国内ではCBS。
- 現地CEは、海外CEと国内クライアント、企業との仲介、税制度での協力などの役割を担う。

3. 会場における意見交換の概要

会場からは、次のような意見が出された。

- 前半は“いかに信頼関係を築くか”について意見が集中した。PUBの実施事業におけるチームづくりなどの例が紹介された。
- 中国においては言葉の壁があり、密なコミュニケーションを持つことの難しさが指摘された。

- インドについては言葉の壁のないものの、CE選定や資金面、技術者育成など、異なる課題があることが伺えた。

4. 総括(FIDICの役割)

本ワークショップの総括は、9月12日のWorkshop Reportにおいて行われた。

- パートナーシップを構築する上での課題としては、①リスク配分、②コミュニケーション・信頼関係の構築、③制度の構築があげられた。
- これらの解決に向けて、aチームづくり、bコミュニケーション、c透明性の確保が必要であることがあげられた。
- FIDICとしては、現地技術者との関係構築や、調達者へのガイダンスなどの役割があることを確認した。

5. 終わりに

異なる国の、異なる立場(クライアント、海外CE、現地CE)の方が話題提供され、非常にバランスが良かったと思う。海外CEの進出が進み成熟を見せるシンガポールと、新しい市場として注目を集める中国、インドの対比が非常に興味深く、また後者2国においても、日本企業が今後進出する上で留意する点が違うと感じた。

「パートナーシップの構築」は国・地域を問わず、普遍的なテーマであり、円滑な事業実施の難しさを改めて感じた。個人的には「信頼関係」よりも「適応能力」の重要性を感じた。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Workshop 2 : Professional Recognition ワークショップ2：職業認識（認定）

株式会社東京設計事務所 東京支社 下水道グループ グループマネージャー
技術研修委員会FIDIC Policy推進分科会長 狩谷 薫



日 時：2007年9月12日(火) 10:45～12:30
場 所：Suntec Singapore International Convention and Exhibition Centre, Room 301-2
参加者：座長: Lee Chuan Seng (シンガポール)
発表者：Gue See Sew (マレーシア), Bill Howard(米国)
実際には、ビザの関係でSew氏は参加できず、その発表は座長が代行をした。
グローバル化の進展に呼応して、各国は自国

の技術者の保護と育成を図って来ているが、実際には技術サービスは国境を超えて提供されることが多くなってきている。このような状況の中、職業技術者やCEに対する資格に関して課題が投げかけられている。本ワークショップでは、このような状況におけるサービス取引やその取り扱われ方に大きな影響を与える主要な課題に関して議論が行われた。国際的な基準の必要性、国相互の職業認識や地域的規制等に関するFIDICの役割

に関しての議論が中心であった。

1. エンジニアの国際的流動性(座長が発表を代行)

エンジニアにとっての国際的流動性の重要性、エンジニアの流動性促進のための国際的合意の必要性を各種の事例をもとに紹介した。

- 国際的な経験は個人(技術者)、企業及び経済において有用であるし、ユーザー及び消費者は海外で働いた実績のある技術者の能力・経験・標準に信頼性を感じる。
- 多国間における国際的な取り決め⇒エンジニアリング教育に関するワシントン合意(WA)、経験豊かなエンジニアの独自の取り決め(ASEANエンジニア、APECエンジニア、EMF国際エンジニア、Euroエンジニア)
- WA⇒教育プログラムの同等性を確保し、実践的な要件を満たすよう、基準・方針・手続きに基づき、教育プログラムの認定を行う。職業エンジニアの登録・認可団体から認められている。
- ASEANエンジニア登録(AER)⇒エンジニアのデータベース構築、継続的な能力更新、文化的職業的な関係の促進、ASEANエンジニアの流動性に関する国際的な認識を得ること等が目的。2007年6月現在、10ヶ国が加盟し、1,424人が登録。
- ASEAN MRA(相互承認協定)⇒エンジニアリングサービス業の流動性の促進、基準や品質の最良化のための情報交換を目的に2005年7月に締結。
- APECエンジニア⇒APEC署名国間での技術者の流動性を確保するために、2000年に創設。認定されたエンジニアリングの終了、自国での独立的な業務実施の認定、卒業から7年以上の実務経験(最後の2年は主要な業務での責任ある立場での経験)、CPDの達成が条件。
- EMF(技術者の流動性フォーラム)⇒技術者の国際的流動性促進のために、継続的な相互検査・評価による信頼性の高い相互認証を目的に、2001年に創設。WA条項に適合した組織により認定されたのと同等のエンジニアリングの単位を有しAPECエンジニアと同様の要件が必要。
- これ以外に、Bologna合意やユーロエンジニア資格など欧州での資格が紹介された。
- 国際的な取り決めにより、技術者の教育や職業技術者の新規の基準の受入、高い技術と一貫性の確保、継続的な融合や協調が促進されるメリットが達成された。しかし、市民権の問題による技術者の不足、12年間の教育後の4年間の教育、持続可能性に関

するリスク管理や倫理、多くの組織の管理者やリーダーの新たな供給源の確保等の今後の課題が出てきている。

- 将来的な選択肢としては、AER登録の利用や世界エンジニアリング登録等の創設が考えられるが、当面は地域にあった2国間や地域内での合意の形成が必要である。

2. 米国における職業技術者(PE)免許

米国における職業エンジニア(PE)資格を紹介し、その課題等が議論された。

- PE認可⇒州によって管理され、公共の安全や福祉を守り、個人の業績を測定するメカニズムを提供し、専門分野を明確に規定し、流動性の基礎を許容することが目的。
- 1907年にワイオミングで初めて法制化され、1947年までに全州が技術免許法を制定。
- PE資格取得に関して、各州各様のルール等があるが、典型的な手続きは以下のとおりである。
 - ⇒ 教育：ABET(エンジニアリング及び科学技術のための認定委員会)認定大学のプログラムを終了し、エンジニアリングの学士号を取得
 - ⇒ 試験：基礎エンジニアリング(FE)試験を合格する⇒エンジニアリング・インターンあるいは訓練エンジニア(EI)
 - ⇒ 経験：PEの監督下での4年(修士以上は3年)の業務実績(州によって若干異なる)
 - ⇒ 受験申込み：州にPE試験受験申込み
 - ⇒ 第2次試験：原理及び実践に関する試験合格
- すべての州が免許制度委員会を持っており、委員会は法の運用・調査・執行に関して責任を有す。また、いくつかの州では下記のとおり、免許取得に特別な要件を求めている。
 - ⇒ 特定分野での熟練(例：カリフォルニアの耐震設計、アラスカの永久凍土に関する配慮)
 - ⇒ 評判(良好な人格)、紹介状、英語の堪能さ(11の州と属領)
- ワシントン州を除くすべての州では、PEの肩書きを認定技術者のみの利用に制限している。更に、27州ではエンジニアの肩書きを州によって免許を与えられた個人だけの利用に制限。
- コミティとは、他州で免許を与えられたエンジニアの資格を自州でも認定することで、これは技術者の要求にもとづいて認定される。レシプロシティは2州間での協定により、相互承認をするものである。いくつ

かの州 (NV、NE、ND、NH) はカナダとレシプロシティ協定を結んでいるし、他のいくつかの州はメキシコと協定を締結している。

- 国際的なエンジニアに関しては、36州が海外の大学で取得した単位を認めている。40州は英語を話す国との間での協定であるWAを頑なに堅持している。
- 各州の免許制度委員会からなる国家エンジニアリング及び測量試験者委員会 (NCEES) は、“成果をより高度なレベルへと引き上げ、エンジニアにとって州間での免許制度を単純化するために、資格のより広範な同一性を提供する健全かつ現実的なガイドを州に提示する” 目的で、州の免許法のモデルを作成した。モデルはコミティを解決するために委員会記録プログラムを策定した。しかし、このモデルは必ずしも全ての州で受け入れられていない。
- NCEES 委員会記録プログラムは、コミティにより複数の州での免許を求める技術者のために、証明機関として機能する。申込者は少なくとも1州で免許を有し、自ら申込みをしなければならない。プログラムのもと、NCEES は記録保持者のファイル (大学の成績証明書、免許情報、職業エンジニア等の推薦状、雇用証明書) を維持し、証明する。
- 米国でのエンジニアの流動性に関しては、次のような障害がある。
 - ⇒ レシプロシティやコミティが不十分⇒ エンジニアの州境を超えた流動性が著しく制限
 - ⇒ 現状の州の免許制度委員会は充分機能しており、これを国のレベルに移行するのは極めて大きな挑戦となる。これに免許制度の国際的な枠組みが加わると課題はより一層複雑となる。NCEES 委員会の記録プログラムは有用だが、認めていない州がある。
- 更に、多くの州ではエンジニアリング会社はその州で公共業務を実施するには、そこにオフィスを有するか企業免許を持つ必要がある。また、企業の所有が要求される州もあるし、同様に所有者のある割合が免許を有する技術者であることを要求している州もある。
- ある団体は学士号に加え、30単位時間の教育を免許の要件としており、物議を醸しだしている。継続教育に関しては、州毎に年間の要求が違っているし、免許の更新にはより厳しい要件が課せられ障害となっている。継続教育の義務化に関しては、以前議論が続いている。
- 米国においては、全国的な免許プログラムは近い将来には制定されそうにない。

3. 会場からの意見

上記の議論・説明をもとに、世界的な統一された資格が必要か、エンジニアリングは資格保有者にだけ限って遂行させるべきか、この点でFIDICに求められることとはという観点から、会場を含めて議論を行った。

- 英国では、原子力及びダム以外のエンジニアリングでは、資格がなくとも業務を遂行できる。
- シンガポール・マレーシアでは資格要件が厳しく、登録技術者 (資格保有者) でなければ業務を担当することはできない。
- 米国のいくつかの州ではPEでなくとも、十分な経験があれば業務を遂行できるが、多くの技術者がこれは正しい選択ではないと考えている。
- 南アフリカでは業務はPEが遂行するものと政府が規定しているし、PEにもCPDの蓄積を要件として求めている。
- 国内では資格条件が付けられている状況で、海外では経験が評価されるだけで、登録資格が必要ないのは変ではないか？
- インドでは建築業務には資格が必要であるが、土木業務に関しては必要ない。
- スリランカではエンジニアの資格登録は必要ない、海外企業は業界協会への参加が必要。
- 南米においては、ブラジルでは厳しいエンジニア登録プログラムがあるし、ある米国の州は南米の国と資格の相互承認を行っている。
- タンザニアは最低限、資格登録が必要である。FIDICは登録手続きに関する案を作成する必要があるかもしれない。
- 米国法曹協会と米国医学協会は、職業に関する要件等を自ら規定している。この点から、如何にして我々は自らの職業を護るかを考える必要がある。
- フランスには、資格登録等は一切なく、経験と推薦により業務を担当できる。世界的な登録システムは官僚的となることが想定され賛成できない。FIDICが主導権を取る方が望ましい。
- EUでは基本的に自国で業務を出来るのであれば、海外でも業務が出来るべきであるという考えがある。各国の法的責任や保険制度も違うので、一律の資格登録は不可能 (mission impossible) なのではないか？ロビーイング等の方法が適当ではないか？
- 開発途上国では、開発を急いでいることから、FIDICが、バランスを勘案して、先進国と当事者のやり方を実施しつつ技術者を育てる方法を考えて出して欲しい。
- 最後に座長より、データベースが必要で、共通のプ

ラットフォームを作る努力が必要であるとの結びの言葉があった。

4. 日本の対応に関する意見

我が国には技術士及び1級建築士があり、これがAPECエンジニアとの相互承認の対象になっている。国内では、業務の内容・顧客により技術士資格やRCCMが管理技術者の要件とされたり、経験年数だけが要件になったりしている。一方、JICAやJBICで実施される海外案件に関しては、特に技術者資格は要件とされず、むしろ海外業務や同種業務の実績等が重要視さ

れている。

上記のような国際的な状況を見ると、今後は国際的な資格要件も重要になってくる。現状ではAPECエンジニア資格の動向や、技術士会・土木学会・建築学会等の動向に注視することが重要である。AJCEとしては、他の関連団体とも協力して、以下のような観点から検討を進める必要がある。

- 我が国のCE業界をどのように護るかという観点からのコンサルタント資格の定義・要件
- QBSとコンサルタント資格要件の関連づけ
- 議論にもあった、この点に関するFIDICへの要望

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Workshop 3 : Development the Young Professional -Recruitment, Retention and Knowledge Transfer- ワークショップ3：若手専門職の育成

株式会社日水コン 下水道事業開発部 担当部長
技術研修委員会幹事・国際活動委員会 秋永 薫 児



このワークショップで取り上げている問題は、「コンサルタント業界では、専門家の不足に嘆いており、特に若いエンジニアの不足が叫ばれている。コンサルタントサービスの要求は増えてきており、機会も多い。各社はいかに若いエンジニアや専門家をいかにつなぎとめるかを見出さなければならない。今いる技術者や専門家たちは次第に年を取り、定年を迎えるようになる。彼らの経験や知識を次の世代へ引き継がなければならない。将来の技術者、専門家達のいる業界は若手の肩にかかっているのである。」ということである。

このワークショップでは、3つのテーマとして、「採用 Recruitment」、「人材のつなぎ止め Retention」そして、「知識伝播 Knowledge Transfer」を取り上げ、3人のプレゼンターがそれぞれのテーマで講演を行った。各講演後に6つの小グループに分かれて討議を行い、最後に各グループから代表者が討議概要を発表した。

私のいたグループでは、Recruitment について、講演で紹介されたシンガポールの建設市場の将来性や現在の開発に関する事例とは別に、CEの社会的評価の低さが討議の対象となり、悪循環が起きているという指摘があった。よい人材を採用するには関係者以外への宣伝が重要であること、家族や近所、友人に私たちの仕事をきちんと説明し、一般の人に知らしめることがまず大事である。Civil Engineerであることを恥ずかしがら

ずに言えること、プロの技術者であることへの誇りがまず必要であるなどといった提案や発言がされ、どのように採用を行っていくかについてのアイデアはなかった。

Retention については、講演の中では、CEにとって大事なものは何か、機械でもなく、コンピュータでもない、人であることが主張され、行った仕事への評価やその会社にいることへの誇り、社内での人間関係が重要であることが述べられた。グループ内では、3ヶ月に1回の評価による昇進、昇給査定を行っている事例が紹介されたが、社員全員が昇進を望むわけではなく、担当者として仕事をしたい人もいるので、2つの生き方へのシステムが必要であるとの意見が出された。そのほかCPDプログラムやコンピュータを利用した若手のネットワークシステム、講習会の紹介があった。

Knowledge Transfer については、講演では南アフリカでの事例などが紹介され、家族に仕事のことを話していくことで伝達、伝播の方法などがフィードバックされるという。そしてCPDポイントや教育のための協会(CETA)、各社でのYP支援やRole Model & Mentorsの紹介があった。グループ内では、社内教育システムとしての仮想学校(高校、大学)の事例、シニアの知識をコンピュータデータ化しようとして失敗した事例、QMSに則ったマネージャー養成コース、特定のYPにシニアがついて指導するシステム、グループ勉強会などの事例が紹介された。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Workshop 4 : Choosing the Best Advisors
ワークショップ4：最良のアドバイザーを選ぶ日本工営株式会社 コンサルタント海外事業本部
副事業部長 関 好

1. 日 時：2007年9月11日(火) 8:30～10:30

2. 場 所：サンテック 会議室 303-4

3. 議長及び講演者

議長：Gregs Thomopulos FIDIC 理事

講演者は、カナダのコンサルタント Andrew Steeves 氏、世銀の元調達コンサルタント Gian Casartelli 氏、マレーシア国 DID の Datuk Paduka Keizrul 氏の三名であった。

(1) カナダのコンサルタント Andrew Steeves 氏

【状況報告】

- ・ 弁護士、会計士がインフラ技術者へクレームする風潮になった。
- ・ 基幹産業であった我々のコンサルタント業界が弱体化している。(地位やモチベーションの低下等)

その結果

- ① 技術コンサルタントは単に道具であり、決定者・発注者の信頼されるアドバイザーではもはや無い。
- ② 技術的な最終決定は非技術者によってなされている。
- ③ 技術コンサルタントの調達プロセスは、物品調達同様に会計士や弁護士が作成したプロセスで顧客は行っている。しかしながら、会計士や弁護士は自分で専門家を雇う場合、この調達方法はほとんど使わない。
- ④ このような状況は、最終的に発注者に不幸な結果をもたらしている。

このようなカナダの結果を基に各種提言の説明を受けた。(発注者の役割や提言、コンサルタントがなすべき役割、コンサルタントの調達方法への提言等) 最終的に QCBS から QBS による選定を提言している。

発注者の利点：

a. 事業毎に的確なコンサルタントを調達できること、b. より現実的な施工スケジュール及び予算が得られること、c. 設計変更や係争が少なくなること、d. 発注者/コンサルタント/建設業者/外部組織の間により良好な作業関係が得られやすいこと、e. 発注者は、良好なサービス、品質に加えて、資産価値が高い施設が得られること

【感想】

カナダでは、QCBS から QBS へ変更しつつあるとの事であった。

一方、北米では、PPP や Design-Build が行われており、その中ではコンサルタントの活躍の場が少なく、投資家、弁護士、公認会計士が中心になり、事業の形成、計画、設計、施工が行われているとの印象を強く受けた。講演者の発表内容からすると、PPP や Design-Build におけるライフサイクルコストを考えず、初期投資を抑えて設計・施工が行われている案件があり、その中には将来の O&M コストを考えなかったものや、品質や工期を考えず価格のみで決定している等の弊害があるようである。今後、日本国内でも PPP や Design-Build が増加すると、同様なケースが生まれる可能性がある。

(2) 世銀の元調達コンサルタント Gian Casartelli 氏

【コンサルタント業界の評価】

- ① 米国、英国、オランダ、カナダ：サービス産業の中で成長率が最も高い業界である。
- ② 日本、ドイツ、フランス：R&D への投資が大きく、特許登録も多いが、米国と比較すると生産性がなかなか上がらない。その理由は、技術コンサルタント業界以外の関連業界との交流・連携が少ないこと。
- ③ 世銀の借款供与国：1970 年代後半からコンサルタント業界が低迷している。成長・離陸の兆しが見えない。原因調査が必要。(コロンビア、メキシコ。ベトナム、パキスタン、トルコにおける評価調査 CSA)

【コンサルタント業界の弱点】

- a. サービスの品質低下
- b. 営業環境の機能低下
- c. 革新技術の不足
- d. 競争性の低減
- e. 生産性の停滞
- f. 中堅層のフラストレーション
- g. 頭脳流出

【現況のコンサルタント調達方法】

- a. 価格中心の競争
- b. 不安定な倫理
- c. 公式にはコンプライアンス、一方で非効率な契約に

おける資源配分

【今後のコンサルタント調達方法】

Effective Regulation (役に立つ調達方法) = Effective Contract Allocation (効果的な契約配分)

a) 品質、b) 効率性と経済性、c) 公開・公平な競争、d) 透明性、e) 国内コンサルタントの育成・発展の5点に配慮した配分が必要である。(詳細はPower Point)

【今後の調達における汚職撲滅 (Anti- corruption)】

入札における透明性と調達における汚職撲滅について、入札評価委員会 (Tender Committee) において各委員の評価結果・内訳を全て委員会内にて公表・説明し、話し合い、最終結論を出すことが非常に重要とのことであった。各委員の最終結論を単に集めて決定している例が多々あるが、評価結果を全て出し合い、話し合わない限り入札評価の透明性は確保できないのが現状のようである。

【感想】

世銀は QCBS 調達も採用しているが、価格中心の入札の弊害が出ているようである。コンサルタント報酬が安すぎるとの質問を受け、入札報酬額は弁護士、会計士の 1/3 であり確かに安い。入札に際し、プロポーザルにて業界各社・皆が必要な額を入れるようになれば上がるとの一般的な回答があった。コンサルタントは、事業運営を行う上で、技術のみならず法律、財務、会計、環境、社会等の多分野を知りえる立場にあるが、技術コンサルタント業界以外の各関連分野との水平連携 (横のつながり)、交流が少ない。その知識を充分取り込むことで全体を把握し、再び発注者の Best Advisor、最良の支援者になりえるとのことである。今後の日本の業界を考える上で一つのヒントとなると思う。

(3) マレーシア国 DID 責任者 Keizrul 氏

【通常のコンサルタント調達方法及び留意事項】

- ① 財務省 MOF に分野毎に登録されているコンサルタントであることで、ローカルコンサルタントに優先権ある。
- ② 通常登録コンサルタントを順番に指名している。その際、手持ち業務量、コンサルタント規模・能力、入札分野の特性を配慮している。
- ③ 入札評価は、会社経験 15 %、手法 30 %、派遣技術者 50 %、その他 5 %、
- ④ 財務基準は、2006 年版財務省 MOF コンサルタント調達マニュアル、Treasury Instruction & Circulars に従う。

【TurnKey/Design&Build におけるコンサルタント調達】

- a. 調達クライテリア、調達方法は全て応札業者の裁量
- b. ただし、財務省 Treasury's Terms & Conditions に沿ったコンサルタントである必要がある。

【感想】

DID では、TurnKey/Design&Build が増えつつあるとの事であった。TurnKey/Design&Build におけるコンサルタントへの支払いは、Contractor 幹事会社の了解を得て、発注者よりコンサルタントへ直接支払うとのことであった。TurnKey/Design&Build におけるコンサルタントへ若干は配慮しているように感じたが、制度的にも不十分であるとの印象を受けた。

4. WS を通じて

全般的に QCBS の弊害が発生しつつあるのか、Quality を確保するための提案や意見が多かったと感じた。また、近年 QBS と QCBS の議論がなされてきたが、この品質要素と価格要素の評価配分は、Political Issue (各国の政策問題) との意見があったことを追記する。(発注者の財政事情と多くの事業の必要性から判断との立場の参加者もいた。)

(建設技術研究所 河上加筆)



特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Workshop 5 : Growing and Sharing Expertise
ワークショップ5：専門的経験の育成と共有株式会社日水コン 東京下水道事業部技術第一部 部長
政策委員会副委員長・技術研修委員会幹事 春 公一郎

日 時：9月11日(日) 10:45～12:30

場 所：Suntec Singapore 303-4

議 長：John Ritchie (Chair)

Prem Kumar (マレーシア・SMHB 社)

Michael Reyes (フィリピン協会会長)

Sherif Wassef (エジプト・ワッセフ設計事務所)

1. はじめに

本ワークショップでは、新たなマーケットやチャンスを生かすコンサルタント企業間の連携について探ることとなっていたが、実際の中身は、グローバル・コンサルタントとローカル・コンサルタントとの関係に焦点を当てたものであった。

チェアマンのRitchie氏より紹介があったあと、ローカル・サイド3カ国のプレゼンターより、自身の経験に基づく講演がなされた。

以下に各発表の要旨を示す。

2. 国際的パートナーシップを機能させる
(Prem Kumar)

マレーシアのコンサルタント業界は60年代に生まれた。当時は全て英国を中心とした外国企業だった。現在では全て地元企業であり、60年代の30~40社から、1000社程度にまで成長している。

SMHB社の歴史は、英国のビニー社が最初の海外拠点として1961年にクアラルンプールに設計事務所を開設したことに端を発している。当時は、マレーシアが独立を果たした直後であり多くの公共工事が実施されたが、それには海外のコンサルタントの助力が必要であった。その後、1973年にマレーシア人が初めてビニー社のパートナーになった。1980年には、英ビニー社がローカリゼーションへと方向転換し、マレーシア・ビニー社の経営を手放し、これによりSMHB社が誕生した。1995年、英ビニー社がブラック&ヴィーチ社に買収されたのに伴い、SMHB社は完全にマレーシア人による所有となった。

当初は英ビニー社の得意分野である水分野が業務の中心であったが、独自に進化を遂げ、1982年には高速道路等のインフラ、1989年には環境アセスメント分野に進出、着々と業務領域を拡大してきた。

海外コンサルタントとローカル・コンサルタントのパートナーシップが成功するには、両者が長期的な展望を持つことが必要である。そのような長期的アプローチでは、キャパシティ・ビルディングが不可欠である。また、政府の調達政策が重要なことも論を待たない。ローカルに対するキャパシティ・ビルディングのインセンティブとなるような政策が必要である。

3. 設計プロセスの調達(DVD)～知的プロセスのアウトソーシング(Michael Reyes)

エンジニアリング、建築、インテリア・デザイン、都市計画などの分野では、設計プロセスのアウトソーシングが可能である。業務内容としては、紙情報からデジタルへの変換、設計図書作成、ビジュアル化、プロポーザル作成が挙げられる。

企業がアウトソーシングを行う主な理由は、コスト縮減、外部の経験の移入、サービス改善などである。

DVDの需要については、マッキンゼー社のIT、金融、製薬業等、8分野に対する調査では、顧客と対面する度合いの小さな業界ほど、海外へのアウトソーシングのポテンシャルがあり、技術的設計業務の52%が海外アウトソーシングできる可能性があると推定している。

このような莫大な潜在的マーケットからアウトソーシングによる仕事の供給がなされれば、人的需要の拡大も期待される。フィリピンは良質な工学教育カリキュラムを有しており、数学、IT、工学を合わせ、年間40,000人の卒業生を送り出している。

競争力を付けるためには、英語の能力のほか、CAD等、ソフトウェアに対する熟練、国際的基準類への適応(ISO認証など)、学位などが必要となる。また、これを促進していくためには、技術者評価の世界的標準や、国際化を見据えた教育の確立が求められる。ローカルは、これに対応すべく、努力していかなくてはならない。

4. 実りある提携のために(Sherif Wassef)

他企業との提携(association)には、コンサルタントにとって経験の蓄積、ノウハウ交換やキャパシティ・ビルディング、よりよい報酬・利益といった多くの利点がある。

一方、文化的違い、言語的問題、法律の違いなどによってものごとが複雑化したり、誤解や摩擦が生じたりする場合もある。したがって、提携は自発的なものでなくてはならない。

提携を成功させるためには、まず、適正な技術力、知識、人員確保、地理的条件、財源、瑕疵担保保険の範囲、マネジメント能力を有しているかどうかを公正に判断しなくてはならない。また、業務遂行中は、提携相手との相互信頼、健全なコミュニケーション、互いの領域に踏み込んだ協力、ビジネスとしての公平性を心がける必要がある。

ワッセフ設計事務所では、これまで、フィラデルフィアのH2L2社の下請けとして参加したアメリカ大学(カイロ)におけるアカデミック・センター等のCMのほか、カイロにおける建築BOTプロジェクトへの参加経験がある。後者のプロジェクトでは、ワッセフは地元ゼネコンOCI

の下請けとして参加したが、建築設計についてはクライアントの国であるフランスの事務所が担当した。OCIは当初ワッセフと建築事務所の両者に声をかけたが、プロジェクトが大規模で、両者ともそれほどの人員を割けないこと、クライアント(仏)と現場(エジプト)の距離を考慮して、皆が納得する形で提携体制が整った。

5. おわりに(所感)

事前のふれこみから、異業種間の連携といった内容を期待していたが、途上国サイドからの報告といった内容に少々失望した。基調講演のあとの討議においても、途上国サイドからのコメントに終始し、もっぱら技術移転に関する不満であった。しかしながら、ITによるボーダレス化に伴い、ローカル・コンサルタントへのアウトソーシングなどは更に進んでいくだろう。長い目で、良好な関係を構築していく必要がある。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Workshop 6 : Collaborate or Risk All ワークショップ6：協同あるいはリスク

株式会社日水コン 河川事業部 副事業部長
国際活動委員会副委員長 蔵重俊夫



日 時：2007年9月11日 14：30～16：30
場 所：シンガポール、サンテック国際会議場、3階会議室 303-4
議 長：Kevin Corbett, Faber Maunsell, UK
講演者：Keith Lonsdale, Berrymans Lace Mawer, UK
Nora Fung, ACE, UK
Steve Bamforth, Griffith & Armour, UK

1. 調達、協同、企業経営 (Kevin Corbett)

まず、議長のK.Corbett氏より、調達時にコンサルタントへ転嫁されるリスクについての概要が紹介され、リスク・マネジメントの基本的な枠組みを提示した後、ワークショップの議題が次のように示された。

ワークショップの議題

- (1) コンサルタントのリスクマネジメントにおける挑戦
- (2) 関係者間でのリスク分担の適正化
- (3) FIDICへの期待

CEの負担となるリスク

- | | |
|----------|-------------|
| 1) 法的リスク | 2) 経営的リスク |
| ● 無制限責任 | ● 財政的な責任の上限 |
| ● 性能保証 | ● 倒産 |
| ● 協同責任 | ● 設計変更 |
| ● 賠償責任 | ● 債務保証 |
| ● 製品保証 | ● 費用支払い |
| ● 勤勉条項 | |

リスク・マネジメントの枠組み

- 良い顧客・チーム・プロジェクトの選択
- 特記仕様の子細な定義
- リスクの明確化
- 能力と技術の研鑽
- 適切なプロジェクトマネジメント

2. 受け入れがたいリスクと保険 (Keith Lonsdale)

コンサルタントの陥りやすいリスク管理上の落とし穴に対する基本的な留意事項が示された。

- (1) CE契約合意書において示される事項は“全て”

実施しなければならない

- (2) 適切な技術と資格を備え、類似した業務経験を有する技術者で業務遂行しなければならない
- (3) CEの設計は関連制度に合致し、必要な承認や合意を得るものでなければならない
- (4) CEの設計は、顧客の期待通りに完成させなければならない
- (5) 顧客側にどんな財政的な事情があろうと最も効果的かつ効果的な設計をする必要がある
- (6) CEが提出済みのデザイン変更を行う場合、設計ミスとみなされ、工期延長もない
- (7) 工事完成後も保険加入を維持する必要がある
- (8) クライアントは文書による通知でCEとの契約を中断させることができる
- (9) 合意書の不履行の場合、あらゆる責任・損害・損失・コスト・出費を補償することになる
- (10) 工事完成するまでの間、他の地域の裁判所の判決を参照する権利を与えられない
- (11) 調停の対象となった条項は、申し立て者が変更しない限り変更することができない
- (12) CEはあらゆるサービスの品質についてClientを保護し、かつ補償することに同意が必要
- (13) CEは、それが怠慢行為である以上、Clientを保護し保障することに同意が必要
- (14) CEではなく、設計者 (design professional) についても顧客の保護と補償の責任がある
- (15) CEはCEの雇用主が認定するであろうと思われる第3者についても保証することになる

3. MAの役割 (Nora Fung)

ACEはリスク管理に力を入れているMAであり、そこでの活動について紹介がなされた。

- (1) ACEの戦略
 - CEの声を一つに (Speak with one voice)
 - 業界のイメージアップ (Raise profile)
 - 倫理と価値の向上 (Elevate ethics and values)
- (2) 活動のプライオリティ
 - 加盟企業の注目する活動の実施 — リスクマネジメント
 - クライアントの理解の向上 (クライアント参加型セミナー、懇談 等)
 - FIDICへの参画
- (3) リスク・マネジメント活動
 - ビジネス・ヘルプラインの開設

- CE合意書のレビュー
- リスク・マネジメント・キットの開発
- 紛争解決パネルの開発
- ACE合意書の利用促進
- 法的・経営的な解説書の発刊
- セミナーの実施
- 最小条項で購入できる保険の開発
- 建設責任問題に関するキャンペーン

4. リスク・ダンピングの実例と教訓 (Steve Bamforth)

リスク・ダンピングとは、何の根拠もなく、リスクを他者に押しつけることであるが、その事例が紹介され、結局、リスク・ダンピングで得するなどというのは神話であると結論した。

- (1) 会計士は£200,000要求したが、£80,000しか支払われなかった業務で、会計士はサービス内容を制限し、責務を軽くした。相手を利さないビジネスは、自分も利することはない。
- (2) 顧客が経費節約のため水道水でなく海水をラグーンに入れ、コンクリートが劣化した際、設計を請け負ったCEが注意喚起しなかったため、責任を負うことになった。
- (3) 低価格受注しても、責任は軽くなることはない。
- (4) 教会の壁が崩れたときに、設計者は参拝者の安全性確保の面で訴えられた。この際の争点は、合理的に現実的な範囲で危険にさらされないことを確認しているかという点であった。往々にして、費用にかかわらず、こうした安全性の側面は契約外といえども要求され、設計ミスするならば安全サイドにすべきであった。
- (5) 大型商業地開発で重大な工期遅延と経費増があり、関係者間の長く無益な紛争となった。結局保険会社が原告に£3Mを支払って決着したが、原告は裁判で£4M支出していた。

5. おわりに

フロアからのコメントは、①これまでのriskに関する考えを変えて新たなrisk sharingをしていく必要があり、そのためにはallianceが有効である、②risk capをクライアントに働きかけることが重要である、③小さな会社が多い国のため、合同で保険に加入するシステムを構築した など、各国CE協会活動としての紹介が多く、CE協会のイニシャティブをどう設定するかの議論も重要と感じられた。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Workshop 7 : Partnering for profit
ワークショップ7：利益を目指した提携日本工営株式会社 コンサルタント海外事業本部 民活プロジェクト部課長
国際活動委員会 CC 分科会 藤原 亮太

1. ワークショップの概要

会議名：Solution 1, Partnering for Profit-Win/Win/Win Contracting

日 時：9月11日(火) 8:30～10:15

場 所：Suntec, Level 3, Meeting Room 306

議 長：Richard A. Kell (豪)

Chairman, Cardno International

発表者：1) Robert De Wet (豪)

Manager, Relationship Contracting Group, John Holland Group

2) Dennis Walsh (豪)

Programme Director, South East Queensland Infrastructure Plan

3) Tony Barry (豪)

Managing Director, Connell Wagner

4) Chris Newcomb (加)

President, McElhanney Consulting Services Ltd.

2. ワークショップの内容

①テーマの説明(議長より)

- 1) オーストラリアでは、様々な分野における社会資本がアライアンス形式の契約で整備されるようになってきた。これは発注者／建設会社／コンサルタントの三者が契約リスクを共有しようとするものである。
- 2) アライアンス形式の統合管理組織により、従来の「点の取り合い関係」よりもプロジェクトの運営に柔軟性が増加する。そして工費や工期の短縮、発注者のより大きな満足が期待できる。
- 3) 発注者／建設会社／コンサルタントそれぞれから発表を行う。そしてリスクを共有するためのアライアンス契約における次の4つの基本方針について、それぞれの立場から意見を述べてもらう。
 - ① プロジェクトの成果を見通すこと。
 - ② 敵対関係や紛争が起こらないように。
 - ③ リスクを明らかにし、契約のもとで共有すること。
 - ④ 透明性:「健全な」プロジェクトが目標。

注)「アライアンス」

日本では「パートナーリング」と呼ばれている。これは、一つの建設プロジェクトに係わる利害相反者(発注者対建設業者)がチームのパートナーとしての行動をすることを前提に、様々な事象への対応に際し、各々の立場を越えてプロジェクトに最善の選択を行い、リスクの未然防止或いは被害の最小化を目指して、一つの協働チームとしてプロジェクトを遂行することである。

② 発表—1

[建設業者] Robert De Wet (豪), John Holland Group

- 1) 作業分担や責任範囲、リスク分担について従来形式の契約では分けられているのに対し、アライアンス契約では分かれている部分が少なく殆どが共有されている。(図1)
- 2) アライアンス契約が適するのは、リスクが複雑／未知、作業分担や責任範囲をはっきりと決められない、改良／増設工事で協議・調整すべき関係者が多い、などの特徴を持つプロジェクトである。(図2)

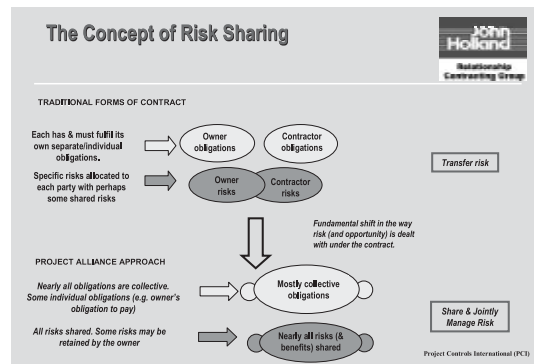


図1

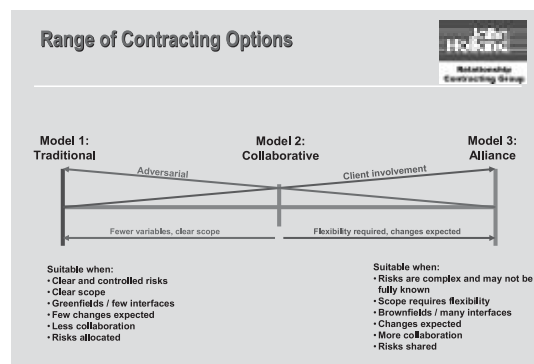


図2

- 3) プロジェクトでは発注者／建設会社／コンサルタントより人材を供出して、一つの統合組織を形成する。ALTは方針を決定し、AMTは実施部隊の管理を行う。(図3)
- 4) この組織をプロジェクトの成功のために機能させるのはリーダーシップである。それは(a)アライアンスがどうあるべき／何を達成すべきかに明確な見通しを持ち、(b)プロジェクトチームの達成目標を設定し、(c)厳格にそれらを達成する権限を与えられ、(d)何があろうともスタッフをプロジェクトに引き付けておく強い信念と勇気をもつ、というものである。

③ 発表－2

[発注者] Dennis Walsh (豪), South East Queensland Infrastructure Plan

- 1) クイーンズランド州政府所有のクイーンズランド鉄道は、同州南東部での整備計画実施機関として「南東クイーンズランド整備計画鉄道事務所」(South East Queensland Infrastructure Plan Rail Office)を設立した。
- 2) アライアンス契約を適用するプロジェクトは次の場合である。(a) 設計の完成度が低い。(b) 多くの予見不可能なリスクがある。(c) 多数の複雑な関係者間調整が必要。(d) クイーンズランド鉄道の積極的な関与を要する。(e) 関係者の勤勉な気質が期待できる。(図4)
- 3) クイーンズランド鉄道にとってのアライアンス契約でのリスクは次の通り。(a) この形式での経験が少ない。(b) 別個に選定された建設業者とコンサルタントを如何に統合するか。(c) プロジェクトを通じてキーパーソンとその役割を如何に維持・継続させるか。(d) この形式の財務的な特長を州政府に納得してもらわなければならない。
- 4) 契約金額からの増額分、減額分とも上限値がある。(図5)

④ 発表－3

[コンサルタント] Tony Barry (豪), Connell Wagner

- 1) Connell Wagner社は既に7つのアライアンス契約に参加した。
- 2) 発注者のメリット：プロジェクトを通して密接に参画、全てのチーム関係者はプロジェクトの成功を目指す、支払額は成功の度合いで変化、設計者と建設業者とが真に連携、工期短縮、紛争が無い。
- 3) 建設業者のメリット：制御不能なリスクが少ない、建設リスクをプロジェクトの初期に検討。工法を考慮した設計、設計やそのプロセスを知ることが出来る、顧客との距離が近い、プロジェクトのスタート時にリスクを特定し方針について合意される。

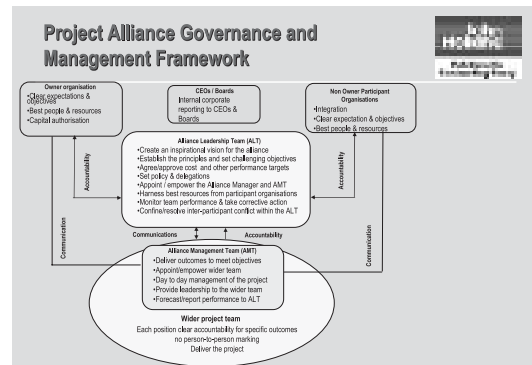


図3

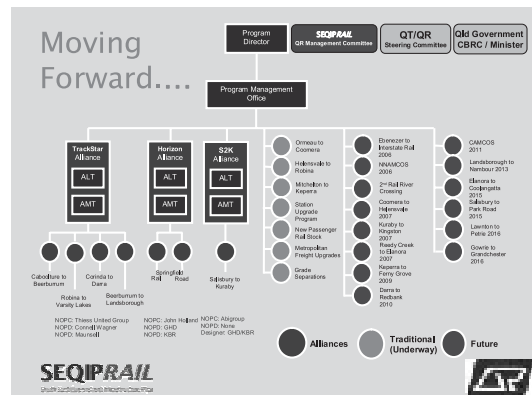


図4

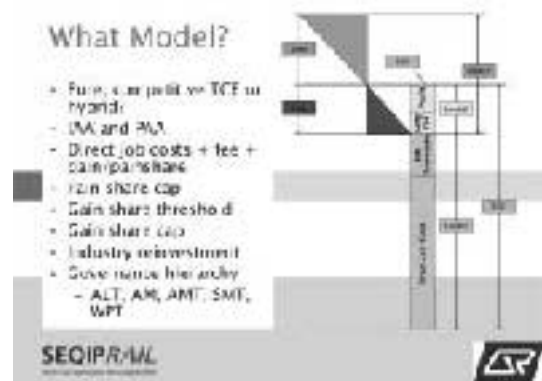


図5

- る、顧客との距離が近い、プロジェクトのスタート時にリスクを特定し方針について合意される。
- 4) コンサルタントのメリット：プロジェクト／工事を通じて良い影響、顧客との良好な関係、最も重要な事項に資源を配分、プロジェクトのスタート時にリスクを特定し方針について合意される。
- 5) アライアンス契約の短所：コンサルタントにとって入札費用が高くなる、費用と時間リスクは発注者へ、会社の幹部層がプロジェクトに時間を割かれる、組織管理がより重要に。
- 6) アライアンス契約の長所：一体化した組織、他人を

責めない雰囲気、困難に取り組む大きな成果、参加者間の良好な関係。

- 7) アライアンス契約の課題：保険が複雑に、法的責任と信頼性を明確に、チーム内の密接なコミュニケーション、アライアンス構成各社の幹部層の定期的な関与、アライアンス終了後の書類の所有権・保管。

⑤ 発表—4

[コンサルタント] Chris Newcomb (加), McElhanney Consulting Services Ltd.

- 1) 北米では、より安い価格で建設工事をやらせるのが良いという文化があり、発注者／市民への啓蒙が必要である。

⑥ FIDIC としての対応

- 1) 今後、ガイドラインの作成を計画しているとのことであった。

3. 日本における課題

- 1) アライアンス(=パートナーリング)は、発注者、建設者、コンサルタントが契約以前にお互いに信頼しあい、共通の価値観を持っていることが必要である。
2) 日本の団体・企業間ではこのような環境にあり、アライアンスに適していると思われる。しかしながらアライアンスも契約によって形成されるものであり、従来の慣習としての協調関係とは区別しなければならない。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Work Shop 8 : Delivering quality services-Essential Tools ワークショップ8：品質確保のためのツール

株式会社日水コン 東京下水道部3部1課長
国際活動委員会 ASPAC 分科会 赤坂和俊



会議名：Work Shop8 Delivering quality services-Essential Tools

日時：2007年9月11日(火) 10:00～12:45

場所：Meeting room 306, Level 3, Suntec

議長：Adam Thornton (NZ)、ファシリテーター：Andrew Read (NZ)、Rick Prentice (Canada)

1. 目的

今回FIDICが作成した“Definition of Services ガイドライン”についての紹介と様々な議論の結果を反映させて国際的な標準化を図っていききたい。このガイドが、建築プロジェクトの一貫プロセスを規定するために、発注者、コンサルタントそして施工者に向けての一般的なチェックリストおよびベンチマークとなることを意図するものである。

2. ガイドラインで規定する9つのフェイズ

1. Appointment Phase [or Engagement]	コンサルタント指名段階
2. Pre-Design Phase [or Programming]	計画段階
3. Schematic Design Phase [or Concept/Preliminary]	概念/予備設計段階
4. Developed Design Phase [or Design Development]	実施設計段階
5. Construction Documentation Phase [or Detailed Design/Working Drawing/Contract Documents]	詳細設計図面/契約図書
6. Building Permission Application Phase	建築確認申請
7. Procurement Phase [or Contract Award/Bidding/Negotiation]	入札・契約段階
8. Construction Phase [or Project supervision/Construction Monitoring]	施工段階
9. Post-Construction Phase [or Commissioning/Defects Liability]	引渡し段階

3. Appendix A Consultants Brief について

これはコンサルタントを指名するにあたってのTORに相当するものである。

発注者との間のコミュニケーションのベースとなり、よくできたBriefは双方の利益につながると述べた。内容は19項目からなる。

4. Appendix B Construction Monitoring について

これは施工監理にあたるもので、プロジェクトの規模、複雑性、重要度に応じて監理の水準を5段階に分けてそれぞれの監理の要点と短いコメントが付いている。

水準を決定するために4つのパラメーターを設定し、プロジェクト毎にパラメーターに点数を与え、合計の大小により評価する方式となっている。更に各水準の報酬基準がプロジェクトの工事費に応じて、チャートで示されている。

強調されていたことは、“Full”エンジニアリング・サービスはConstruction Monitoring までを含むべきであるということであった。

5. グループ・ディスカッション (6グループ)

(1)トピック(5項目)

- ① このようなガイドはあなたの国で有用か?

- ② このようなガイドは途上国で有用か？
- ③ 各段階の分け方と名称はこれでよいか？
- ④ 各段階のチェックリストは必要か？
- ⑤ その他全体的な意見は？

(2) 議論の内容

- ①と②：殆どのグループがイエス。
- ③：ヨーロッパから建築確認申請の順位についてコメントがでた。数は余り問題ではないし、名称も議論がなかった。
- ④：イエス。但し、プロジェクト毎に必要な要素もある。
- ⑤：次のようなガイドの追加を求める意見があった。

(a) Limitation of Liability、(b) Selection Method、(c) Risk Management、(d) Safety Guide for Consultant、(e) Sustainable Development

(3) その他の発言

- (a) ポーランドでは施工監理の必要を法律で規定
- (b) 保険業界はコンサルタントによるフル・サービスが必要という立場
- (c) アイルランドでは Health & Safety をコンサルタントと施工者に分けて規定

6. おわりに

- (1) 品質確保にはプロジェクトの初期段階（エンジニアを選ぶ段階）が最も重要であり、発注者が如何にプロジェクトに適したエンジニアを選定するかが問題である。
- (2) 日本において、非常に曖昧な仕様書で発注されるケースも見受けられるので、発注者の注意を喚起する意味でも有用かも知れない。
- (3) サービスの内容をもれなく規定することは「品質確保」という視点において必要である。その意味で本ガイドは適切な方向を目指している。また、サービスの全容を詳細に提示することで、発注者に業務量の大きさ、深さ、広さを理解してもらい、コンサルタントの業務の価値と価格に対する許容度を高める効果があれば好ましいことである。
- (4) コンサルタントによる施工監理の必要を強調している点は、わが国において、特に土木事業においては、依然として発注者による施工監理責任となっていることは、かなり異なる（遅れている）部分である。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Workshop 9 : Development of New Skills ワークショップ9：新技術の発展

株式会社日水コン 海外事業部業務部長
国際活動委員会CB分科会長 桜井 一



2007年9月11日（火曜）14：30～16：30
Suntec 会場3階 306号室

本ワークショップは、Solution シリーズの3番目のワークショップとして、元FIDIC会長のEigil Steen Pedersen（デンマーク）がチーマンとして約50人が出席し実施された。短時間のワークショップだが、下記6人のプレゼンテーションがあった。

1. Dan Yang 女史：アジア開発銀行の主任調達スペシャリスト
2. Exaud Mushi：タンザニアのコンサルタントGAMAチーマン
3. Cecil Rose：南アのコンサルタント協会会長
4. Jacob Lipa：米国のコンサルタント
5. Javad Haddan：イランのコンサルタント、FIDIC・CBCメンバー

6. Gian Casartelli：世銀の主任調達スペシャリスト

まず、チーマンからプレゼンターの紹介と議事の進め方について説明され、その後「人は重要な資源であり、継続的発展が必要」と強調された。そして、途上国と先進国のMAおよびCEが協力関係を築き、しっかりしたポリシーを持ち、融資機関等に認識してもらい、FIDICの指導の下で、コンサルタントのキャパシティビルディング(CB)が必要であることを付け加えられた。

最初のプレゼンターは、Yan女史で「An Improved Procurement Environment for Consultants」について発表された。概要項目は下記のとおり。

- アジ銀はコンサルタントのCBを重視している；TORでローカルコンサルタント利用を奨励；途上国のコンサルタントを最低1社ショートリストする；カザフスタン等でローカルコンサルタントに対する研修実

施；クライアント側のCB調査とトレーニングが必要；世銀等協力・ハーモナイズ(2006年ガイドライン改定)利用；クライアント側の調達活動への関与と規制実施；重点分野：インフラ、金融、エネルギー/環境、技術向上

続いて Mushi 氏が「Challenges and Suggestions for Optimal Engineering Capacity Utilization」とタイトルをつけて発表された。

- 人材資源は限りがあり、現有を効果的に高める；FIDIC 書物をローカル状況・言語にあわせ活用；ローカルコンサルタントを教育・向上していくことは国の発展につながる→政府等は資金を出す必要がある；Globalization 結果 LDC コンサルタントが増え、案件参加比率ダウン；汚職は関係者全員の理解・協力で対応必要；FIDIC は IFI が利用できる調達ドキュメントを作成し、IFI は積極的に利用必要

次に Rose 氏が「A South African Perspective」について話された。

- 南アは先進国であり途上国；5%の伸び+ワールドカップ2010でインフラ整備(投資増)；人材不足：退職者の再雇用+新人の確保と研修；1998年に Skill Development Act(計画的な研修と教育実施)や1999年に Skill Development Levies Act(給与が1%アップ)で積極的；CPDにより継続教育の義務付け；エンジニア、テクニシャン等に差をつけて競争意識；協会による技術者養成学校(技術とマネジメント)

引き続き、Lipa 氏が「Better People, Better Solutions, Better Results」について、発表された。

- 米国の建設マーケット増で技術者人材不足→外国会社から調達か外国で会社を作り調達；パートナーリングにより、リスク分散、強力なチーム作り、広範囲な案件への参加；DB関連案件の増加への対応；褒賞制度によるイノベーションとRDの推進

5人目の発表者として、Haddan 氏が「途上国のCB利用」と題し、イランと途上国のCBの重要性・状況について話された。

- CBとは、力を付ける/力の創造/力の開発(南ア大臣)；途上国の問題：技術/インフレ/汚職/政治/調達

制度不備/契約条件不備/業務量・形態の急激変化；問題解決：トレーニング/政府へロビング/FIDIC・国際機関関与/MA間の交流；技術だけでなくマネジメント能力(プロジェクト推進、リスク、品質、教育)の向上が不可欠；FIDICのGuide To Practiceの有効利用

最後のプレゼンターとして、Casartelli 氏が「コンサルタントへの期待」に関し発表された。

- CBには、経済・教育・設備・イノベーションの総合投入；コンサルタントには中立・イノベーション・技術シンクタンク期待；米国、カナダ、オランダ、オーストラリアでは、コンサルタント業務が急速に伸びる一方、日本、ドイツ、フランスでは伸びが遅い。しかし、R&D(開発)に使われる金額及びパテントの数は多い←横へのシェアが少ない；コンサルタントは、戦術・政策面、法律面、アディ能力、デマンド創造、R&D、組織力向上と推進が必要

Casartelli 氏の発表の後、10分ほどのコーヒープレークが取られ、下記概要の質疑応答と提案時間となった。

- 途上国の優秀なコンサルタント不足は国の損失；政府やIFI等が途上国コンサルタントのCBに資金出資要；外国へOut Sourcingより同国でIn Sourcing推進；ADB:QCBS採択でローカルコンサルタントの案件参加ポーション・金額が増加；世銀：QCBS案件で、先進国優良コンサルタント会社の興味が薄れた；FIDICのCBCでは、Guide To Practiceを最新化し、近年の必要事項を追加する；ローカルコンサルタント会社のショートリスト化をもっと推進希望；人は重要資源でCBにより良い資源活用する

終わりに、途上国も先進国もコンサルタントの資質・技術・能力の向上・キャパシティビルディング(CB)は不可欠である。しかし、どのように実施できるか？FIDICには多くのドキュメントがあり、これらの有効活用が早道だと思われる。目的にあった、ドキュメントをどのように探し、どのように活用するかは、各国のMAの役割である。また、CBの重要性及びそれにかかる費用負担を融資機関やクライアントに理解してもらうことが必要で、これはFIDICの大きな役割であると思う。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC Member Associations in the Asia-Pacific Region
(ASPAC) Executive Meeting
FIDIC-アジア太平洋協会連合 理事会

株式会社建設技研インターナショナル
業務本部 営業企画室長
国際活動委員会 ASPAC 分科会長 前田 剛 和



1. 会議概要

会議名：ASPAC Executive Committee Meeting

日 時：2007年9月11日 午後5時～6時

場 所：Suntec 303-5

参加者：廣谷彰彦（ASPAC議長）、Salvador P. Castro（フィリピン）、K. K. Kapila（インド）、Karamat Ullah Chaudry（パキスタン）、Yap Kok Ming（マレーシア）

事務局：前田剛和、渡津永子、赤坂和俊

議 題：① 議事録の確認（FIDIC2006ブダペスト大会におけるASPAC ECM、TCDPAP/ASPACラホールセミナーにおけるASPAC会議）
② ECメンバー（理事）の選出について
③ ASPAC活動について（ASPACアクションプラン、教育訓練プログラム、その他）

討議結果：

- ① 特になし。議事録は承認。
- ② 以下の3名が立候補している。各々各国協会の会長。
 - ・ Mr. Dennis Sheehan（オーストリア）
 - ・ Mr. Keshav Kunwar（ネパール）
 - ・ Mr. Nguyen Canh Chat（ベトナム）今回の新たな理事の選出は現理事であるMr. Adam Thornton（ニュージーランド）がFIDIC理事となり、ASPAC理事を退任することによる補欠選挙である。ASPACの規程から理事は5名以上となっており、人数の制限がないことから3名全てを理事にしたかどうかという議長からの提案があったが、現在

19ヶ国の加盟国から成るASPACで8名もの理事は多すぎるという意見が大半を占め、議論の結果、3名より1名を総会における選挙で選ぶこととなった。

- ③現在の2006年の活動状況を踏まえ、2007年から2009年までの3カ年の活動計画を事務局から各理事に説明し、了承を得た。各国で情報を事務局に提供するなど積極的な協力を行うことを確認した。教育訓練プログラムでは、Castro氏よりAdjudicator資格取得のためのセミナーをFIDICの協力を得て各国協会で行うことが重要であることが述べられた。

2. 日本に於ける課題、提案

ASPAC事務局を担当しているAJCEのASPAC分科会は、今回提案した2007年から2009年までの3カ年の活動計画に基づいて、「ASPACを通じて加盟各国間の交流を深める」ことを目標に各年で設定された目標の達成にむけ、活動を行っていく必要がある。各年の目標は以下のとおり。

- 第1年次（2007年）：加盟各国の関心度を高め、コミュニケーションを深める環境を整備する。
- 第2年次（2008年）：加盟各国からの情報を収集・整理し、加盟各国に提供する。
- 第3年次（2009年）：活動に一貫性・継続性をもたせ、更なる拡大のための方向性を提示する。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC Member Associations in the Asia-Pacific Region (ASPAC) General Assenmblly Meeting・Network Lunch FIDIC-アジア太平洋協会連合 総会・昼食

株式会社日水コン 東京下水道部3部1課長
国際活動委員会 ASPAC 分科会 赤坂和俊



会議名：ASPAC Asia Networking Seminar and GAM
日 時：2007年9月12日(水) 12:00～13:00

場 所：Meeting room 303-4, Level 3, Suntec
議 長：Akihiko Hirotani (Japan)

1. 開会宣言並びに出席者紹介

Executive Committee Members	国名	任期(残りの任期)	大会
Akihiko Hirotani (Chairman)	Japan	2006-2009 (2年)	Budapest～
Adam Thornton	New Zealand	2006-2007 (終了)	Budapest～
Karamat Ullah Chaudry	Pakistan	2006-2009 (2年)	Budapest～
K K Kapila	India	2006-2009 (2年)	Budapest～
Salvador P. Castro	Philippines	2006-2009 (2年)	Budapest～
Yap Kok Ming	Malaysia	2006-2009 (2年)	Budapest～

2. ECメンバー選挙

今年で Adam Thornton 氏 (NZ) が1年の任期を終えることから、1名を選出することとなった。前日の EC Meeting で承認されている。立候補は以下の3名である。

Mr.Dennis Sheehan

President of ACEA (Australia)

Mr.Keshav Kunwar

President of SCAEF (Nepal)

Mr.Nguyen Canh Chat

Professor,from VECAS (Vietnam)

しかし、会場からの意見より、以下の3つから多数決で選出方法を決定することとなった。

- ① 規約上、5名以上ECメンバーがいれば、問題ないことから、誰も選出しない。
- ② 選挙により、1名を選出し、ECメンバーを現行の6名とする。
- ③ 3名全員をECメンバーとする。

多数決の結果、②の1名を選挙で選出することとなった。

その結果、オーストラリアの Mr.Dennis Sheehan (写真②) が新しいECメンバーに決定した。新たなECメンバーは以下のとおりである。

3. 議事録の確認

FIDIC2006 ブダペスト大会における ASPAC ECM、TCDPAP/ASPAC ラホールセミナーにおける ASPAC 会議について確認、承認される。

4. ASPAC の活動

① 3ヵ年計画について説明

- 第1年次 (2007年)：加盟各国の関心度を高め、コミュニケーションを深める環境を整備する。
- 第2年次 (2008年)：加盟各国からの情報を収集・整理し、加盟各国に提供する。
- 第3年次 (2009年)：活動に一貫性・継続性をもたせ、更なる拡大のための方向性を提示する。

Executive Committee Members	国名	任期(残りの任期)	大会
Akihiko Hirotani (Chairman)	Japan	2006-2009 (2年)	Budapest～
Dennis Sheehan	Australia	2007-2010 (3年)	Singapore～
Karamat Ullah Chaudry	Pakistan	2006-2009 (2年)	Budapest～
K K Kapila	India	2006-2009 (2年)	Budapest～
Salvador P. Castro	Philippines	2006-2009 (2年)	Budapest～
Yap Kok Ming	Malaysia	2006-2009 (2年)	Budapest～



① GAM 参加状況

② HP の掲載内容について説明

加盟各国の年間スケジュールを HP に掲載することを説明、協力を要請する。

加盟各国のエンジニアリスト(分野、資格者数等)を作成し、HP に掲載することを説明、協力を要請する。

上記、内容のイメージを示した。そのためにはデータを揃えてもらう必要がある。

5. その他

事前に配布した Country Report について、4 カ国 (バングラデッシュ、日本、パキスタン、ベトナム) から返事があった。

セミナーやトレーニングの開催については、概ね賛成の解答があった。

また、Adjudicator/Dispute Board についても同様であった。

また、フィリピンのカストロ氏から教育システムに対する提案がなされたが、時間の都合上、本会議では話し合いを行わず、この後のネットワークランチで、話題提供的に話し合いを持つこととした。

会議名：ASPAC Regional Network Lunch

日 時：2007 年 9 月 12 日 (水) 13:00 ~ 14:30

場 所：Gallery East, Level 3, Suntec

議 長：Akihiko Hirotani (Japan)

6. 話題提供

① フィリピンにおける教育プログラム (CECP)

② TCDPAP ソウル大会 (KENCA)

7. フィリピンにおける教育プログラム

フィリピンコンサルタント協会会長より、パンフレットに示す教育プログラムを 2007 年 10 月 25、26 の 2 日間で実施する旨、説明があった。



② Dennis Sheehan 氏の就任挨拶

趣旨は、現在の FIDIC が実施する教育プログラムは、高価で容易に参加ができないものではない。

そこで、各協会が教育プログラムを実施することで、安価で参加しやすいものとなる。

ただし、あくまでも、FIDIC 協力のもと、実施していくことが重要である。というような内容であった。プログラムは “The Practical Management of Contract Claims and the Resolution of Disputes” と題して実施される。

セミナーは FIDIC の資格を有する講師を迎えて、FIDIC 約款を使用する方々のために実施される。内容は、DAB の仕組みを理解するためのものであり、4 つあるモジュールのうち 2 番目のモジュール (内容はプログラムのとおり) について講義が行われる。

FIDIC 約款の 1999 版、そして、2006 年 MDB



Harmonized 版における DAB の役割等についても、焦点をあてて、講義が実施される。

8. TCDPAP ソウル大会

韓国コンサルタント協会会長より、TCDPAP ソウル大会がパンフレットに示すように“The Role of Engineering in the Globalization Era.”と題して、2008年3月～4月頃に実施される旨の説明があった。

この中で、国際間の自由な競争が、先進国と発展途上国の格差をさらに広げる結果となっている旨説明があり、これを背景に、このグローバル化時代におけるエンジニアの役割を再検討し、将来の方向性を示したい。

【CALL for Papers】

- Organization of Paper Screening Committee : 2007 年 10 月 30 日
- Draft Paper Deadline : 2007 年 12 月 30 日
- Final Selection of Papers : 2008 年 1 月 31 日

Conference Program Schedule (tentative)			
Date	Time	Topic/Activity	Facilitator
Day 1 (Jan 28)	08:00-09:00	Registration	
Day 2 (Jan 29)	09:00-09:30	Registration	
	09:30-10:30	Opening Ceremony	Guest Dignitaries & Honorees
	10:30-11:30	Panel Discussion: AI in Healthcare	Prof. Dr. Jane Smith, Dr. Michael Johnson
	11:30-12:00	Lunch Break	
	12:00-12:30	Keynote Address	Dr. Robert Chen
	12:30-01:00	Workshop: Data Analytics	Dr. Emily White
	01:00-01:30	Networking	
	01:30-02:00	Panel Discussion: Future of AI	Prof. David Lee, Dr. Sarah Kim
	02:00-02:30	Lunch Break	
	02:30-03:00	Workshop: Machine Learning	Dr. James Park
Day 3 (Jan 30)	08:00-09:00	Registration	
	09:00-09:30	Keynote Address	Prof. Dr. Alex Brown
	09:30-10:00	Panel Discussion: Ethics in AI	Dr. Maria Garcia, Dr. John Doe
	10:00-10:30	Lunch Break	
	10:30-11:00	Closing Remarks	Dr. Robert Chen



韓国協會會長挨拶



Network Lunchの様子

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC Group of African Member Associations (GAMA) Networking Seminar FIDIC-アフリカ協会連合 ネットワーキング・セミナーの報告



個人賛助会員
技術研修委員会名誉副委員長 竹村 陽一

日 時：2007年9月12日 12:15～13:10

場 所：Room 301-2, Suntec

参加者：約50人

Chair：Exaud Mushi, Norplan Tanzania, Tanzania

GAMA Africaに出席するのは、昨年のブダペスト大会について、2回目であった。

このセミナーへの参加者は昨年より多くアフリカ12カ国、オブザーバーが韓国、インド、日本、ADBなどで総人数は50名程度であった。

最初に司会のExaud Mushi(今年5月のGAMAボツワナ大会で会長に就任した)がGAMAの新体制による運営の進め方、とくにビジネス志向を目指したいと述べ、そのためのネットワーキングの必要性を強調した。来年のGAMA大会はチュニジアのチュニスで6月2日―4日で開催される。

Exaud Mushiはセミナー参加者の確認のために国ごとに呼び上げて、参加国を確認した。参加者は後ほどGAMA事務局のGeorge Sitaliに名刺を提出するよう求められた。

ついでExaudはGAMA Web siteが今年10月からスタートすること、GAMA事務局の確立計画(中期―長期)特に資金(会費)の問題と各国協会の立ち上げ(組織、事務所、事務局など)を促進し、政府も巻き込んでコンサルタント調達が自分たちの利益につながることを目指さなければ、若年エンジニアも離れていくと危機感を示した。また、南アフリカ(エンジニアリング需要が急増している)とは個別の話し合いをしていく旨をのべた。

この後、フロアーとの議論が行われた。

昨年までFIDIC GAMA Task-forceの委員長を務めたナイジェリアのBayo Adeolaが立って「行動計画」の策定にあたって各国の協力を謝意を表明し、GAMAの新体制が歩みを始めたことを喜ぶ一方、FIDICのCapacity BuildingもアフリカではLDCが多く、基礎的な水準に留まっているのでインパクトが弱い。企業やエンジニアのベンチマークをきっちと構築しなければならないと指摘した。

ADBからのコメントとして、タンザニアの登録エンジ

ニアの例などを引いて、政府に向けてローカル・エンジニアの育成をアピールすべきだとの意見が出た。

南アフリカのエンジニアリング評議委員会の人(?)は能力開発の機会が増加していること、エンジニアのみならず技能者ほかにも範囲を広げていることなどアフリカにおける能力開発の動きをさらに活発にすべきだと述べた。

訓練コースに関しては、派遣する方式はコストが掛かるので、訓練者を呼ぶ方式を考えるべきだとの意見がでた。後者の方式はADBにもあるよしで、活用を話し合いたいとの意向がExaudから出た。

ナイジェリアの人から、今はGAMAが大きくなるチャンスである。GAMA大会をプラットフォームにして自分たちのために、ADB/IBRDなどを頼りにするばかりでなく、10年ぐらいのスパンで自分たちが、自分たちのために何が出来るかを打ち出していくべきだという頼もしい意見もでた。

アフリカには47カ国あるがGAMAに加盟しているのは15カ国と云われる。

Young Professionalsも話題にあがり、日豪交換研修の事例を参照して、GAMAの取り組みを進めたいとのことであった。

最後に来年のGAMAチュニジア大会のChief hostからワークショップで「チームワーク」、「Dispute Adjudication Board」などを取り上げたいこと、環境、水、固形廃棄物なども議題にしたいと表明があった。

オブザーバー参加での印象の第一は、アフリカ各国のCEが自信を持ち始めたというものである。「自助」のような言葉が聞かれるようになっている。

FIDICではBillionプロジェクトが語られることがあるのに、自分たちはMillionプロジェクトをやっていると自嘲めいた冗談が飛び出すこともあるが、南アフリカの成長を梃子にして、各国が上向きの風をつかみたい希望が見え隠れする。

基本的な問題はやはり、CE企業および個々のエンジニアの能力開発であろう。FIDICもADB/IBRDなども機会を設けている模様であるが、アフリカ諸国の真の要求に合ったものかどうか即断できない。(真の能力開発は

クラスルームにおける研修だけでは達成できず、ジョブを遂行するところから生まれる) 21 世紀にアフリカの成長がどこまで達するか予想は難しいが、わが国の国際

支援の一つの地域として、アフリカの自助を助ける施策を打ち出して欲しいと思う。

特集：2007 年 FIDIC シンガポール大会報告

**2007 FIDIC General Assembly Meeting (GAM)
2007 年 FIDIC 総会**

株式会社建設技術研究所 常務取締役
AJCE 副会長 **内村 好**



1. 総会概要

開催日時：2007 年 9 月 12 日 (水) 16:00 ~ 17:15

開催場所：Suntec City Convention Centre, Singapore

出席国：参加 70 国 (欠席数カ国)

日本代表团：廣谷会長、内村副会長、高木理事

2. 議事概要

2.1 2006 年活動報告

06 年度のブダペスト大会の総会の議事録、06-07 年次報告書、06 年会計報告・監査が滞りなく承認された。2006 年度の収入は 2,457 千 SFr スイスフラン (約 245 百万円) で 05 年度より 13 % 増。支出は 2,345 千 SFr (約 225 百万円) である。収入のうち会費が 4 割、出版収入が 4 割を占める。

2.2 新会員の選出

下記の 4 協会があらたに FIDIC 会員として承認された。
Association of Consulting Engineers Malawi (ACEM) マラウイ

Jordan Architects and Consulting Engineers Council (JAREC) ヨルダン

Kazakhstan Association of Consulting Engineers (KACE) カザフスタン

Russian Association of Engineering Consultants (RAEC) ロシア

なお、Affiliate Member (提携会員) として英国の Knowles が承認された。

2.3 定款、細則の変更提案

会員の種別を下記の通り整理するための定款、細則の変更が提案され承認された。

Member Association 会員協会 変更なし

Honorary Membership 名誉会員 変更なし

Sustaining Member 維持会員 ⇒ 廃止し Affiliate Member に組み入れる

Affiliate Member 提携会員 ⇒ MA の有無に関わらず連盟の目的を支援する協会、組織、企業

Correspondents 連絡員 ⇒ 廃止し Associate に組み入れる

Associate Member 準会員 ⇒ MA のない国で CE 活動が主要を占める個人、組織、企業

2.4 2008 年の予算、会費の承認

2008 年度の予算および各国協会の会費が承認された。収入は 2,333 千 SFr、支出は 2,250 SFr でいずれも 07 年度予算の 8 % 程度の増である。

会費については、米国が最大 (上限) で会員従業員数 302 千人で 121 千 SFr (投票権 6 票)、以下、フランス 36 千人 79 千 SFr (5)、英国 34 千人 75 千 SFr (5)、カナダ 24 千人 61 千 SFr (5)、ドイツ 23 千人 59 千 SFr (5)、スペイン 22 千人 57 千 SFr (5) である。ちなみに日本は 5 千人 16 千 SFr (3) で 18 番目であり、中国 18 千人 27 SFr (LDC 割引) (4)、韓国 3 千人 11 SFr (2) である。

2.5 表彰

FIDIC 初代会長 Louis Prangre 賞が Tony Jensen (デンマーク) と Jager Axel (ドイツ) に授与された。

2.6 会長交代、副会長選任

退任するメキシコの Jorge Dias Padilla 会長の退任挨拶のあと新会長にカナダの John Boyd 氏が就任し挨拶を行った。今後 2 年間 FIDIC の会長を務める。新会長の挨拶のキーワードは “Quality” “Integrity” “Sustainability” であった。

また、新副会長に米国の Greg Thomopoulos 氏が選出された。

2.7 新理事の選出

今回退任する3理事(Padilla メキシコ、Mazloun フランス、Adeola ナイジェリア)に代わって下記の3氏が無投票で選出された。

Patrick Batumbya ウガンダ
Pablo Bueno Tomas スペイン
Adam Thornton ニュージーランド

2.8 2011 年大会開催地の選定

アフリカから Tunis (チュニジア)、Abuja (ナイジェリア)の2都市が立候補したが理事会の推薦どおり2011年9

月18日～22日 Tunisで開催されることとなった。これまでのFIDICにおける活動ではナイジェリアが優位と思われたが、セキュリティの問題が考慮されたものと思われる。この結果、今後のFIDIC大会開催地は次の通りとなる。

2008年ケベック(カナダ)、2009年ロンドン(英国)、2010年ニューデリー(インド)、2011年チュニス(チュニジア)、2012年未定(韓国?)、2013年欧州(FIDIC100周年)

※ 韓国は2010年に立候補したが2012年に推薦されることを前提にインドに譲った経緯。



GAMに出席したFIDIC理事
(左から3人目より Boyd 新会長、Padilla 前会長、Enrico 事務局長、右端 Thomopoulos 新副会長)

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

Social Programme 懇親行事



株式会社日水コン
東京下水道部3部1課長

国際活動委員会 ASPAC 分科会 赤坂和俊



株式会社オリエンタルコンサルタンツ
社会環境事業部

国際活動委員会 ASPAC 分科会 渡津永子

1. Welcome Reception

日時：2007年9月9日(日) 19:00～20:30

場所：Asian Civilisations Museum, Empress Place

司会：Lim Pheng Hong, ACES Vice-President

コンラッドホテルのロビーに集合したのが、pm6時前。
さて?どれだけ待っただろう。

時間を確認しておけばよかった。

それにしても人が多い。人、人、人。コンラッドホテルの広いロビーが狭く感じる。

FIDIC関係者はいいが、関係のない人にはいい迷惑だ。何せ、ロビーを長時間(おそらく1時間以上)、占拠されているのだから・・・。

ホテル関係者の冷静を装った慌てぶりが、面白かったのは、私だけか?

まあ、ホテルに来るはずのバスが来ないのだから、仕



① ACEC 副会長の挨拶：Lim Pheng Hong氏



② バイオリンの演奏



③ 会場風景（副会長挨拶後1時間）



④ 会場からの夜景（？）

方がない。

この「バスが来ない!」状況は、本大会中、改善されることはなかった。

さて、到着した2台目のバスに乗り込み、何とか Welcome Reception 開始前に会場に到着したが、ホテルのロビーにはまだまだ、人があふれていた。

pm7時頃、会場はまだまばらな状態。

バイオリン奏者が4名、スタンバイ済み。

pm7時を過ぎたので、シンガポール協会副会長 Lim Pheng Hong 氏の挨拶で Welcome Reception が始まった(写真①)。

副会長の挨拶の後、バイオリンの演奏開始(写真②)。若干、会場の色が鮮やかになったように感じた。

このように始まった FIDIC シンガポール大会。

副会長の挨拶が終了してからしばらくして、到着した人たちでようやく会場も活気づく(写真③)。

Reception 会場が、去年のブタペストと同様、Museum であることから、かなり期待していたが、副会長の挨拶の後、開いた扉は Museum の中へ通じる扉ではなく、屋外へ通じる扉であった。夜景(?)が綺麗(写真④)。

前日に知り合った Adebayo ADEOLA 夫妻(写真⑤)。すてきな民族衣装に身を包み、ナイスです。他にも YPF の面々とも一年ぶりの再会(写真⑥)。

そして、最後に帰路のバスの中(写真⑦)。



⑤ すてきな民族衣装で



⑥ YPF メンバー：本当に若いです



⑦ 帰路のバスの中

2. Opening Ceremony

日 時：2007年9月10日(月) 9:00～10:00

場 所：Ballroom 2, Level 2, Suntec

進 行：Enrico Vink, Fidic Managing Director

2007年 FIDIC 大会の開会式はシンガポールの海辺にほど近い Suntec City Convention Centre で行われた。

Fidic の Managing Director である Enrico Vink 氏が進行役を務め、シンガポール協会副会長の Lim Pheng Hong 氏、Fidic 会長 Jorge Diaz Padilla 氏、Minister for National Development の Mah Bow Tan 氏の挨拶の後、演芸プログラムに入った。

去年のハンガリー大会とは異なり、国の大臣が挨拶を行うことから、Fidic 大会の位置づけが伺える。

式の内容は次のとおりである。

(赤坂記)

(赤坂 記)

9:00～	式次第説明等	Enrico Vink氏	写真①
9:05～	ACES挨拶	Lim Pheng Hong副会長	写真②
9:10～	FIDIC挨拶	Jorge DiazPadilla会長	写真③
9:20～	Minister for National Development Government挨拶	Mah Bow Tan大臣	写真④
9:40～	演芸	中国獅子	写真⑤
		中国舞踊？	写真⑥
		インド舞踊？	写真⑦
		モダンダンス？	写真⑧
	閉式		



①進行役： Enrico Vink氏



② Lim Pheng Hong 副会長



③ Padilla 会長



④ Mah Bow Tan 大臣



⑤中国獅子



⑥中国舞踊？



⑦インド舞踊？



⑧モダンダンス？

3. Gala Dinner (12 Sep)

Shangri-La HotelでのGalaは、正装した紳士淑女が集り、大変華やかであった。参加者の多くはご夫婦で参加されており、女性陣の民族衣装やイブニングドレス姿には思わず目を奪われてしまった。

ロビーでの歓談後、会場に入場。余談であるが、Gala

晩餐会の席順は大会受付時に別途申し込むことになっている。申し込みが遅れると末席になるとあって、Gala晩餐会用デスクは大会初日から終日賑わっていた。日本からの参加のベテランの皆さんは、早々と良い席を押さえておられた。初心者には要注意である。

ホスト国や新旧のFIDIC会長がそれぞれ挨拶される



正装した紳士淑女で華やぐ会場



美声を披露される藤江事務局長



なか、食事と歓談がはじまった。

広い会場のあちこちで、歓談の輪、カメラのフラッシュが光り、FIDIC大会の名物カメラマンの方が大活躍されていた。

歓談の後、ライブコンサートがはじまった。

藤江事務局長ご夫妻が先頭を切ってダンスをはじめられ、山下新事務局長ご夫妻ほか、欧米からの参加者がこれに続き、会場が一気に盛り上がった。

女性ボーカルがうたう「ベサメ・ムーチョ」。しかしどこかで聞いた声が……。気がつけば、藤江事務局長が舞台上でマイクを握っておられるではないか！

日本ではなかなか体験できない、大変華やかな夜であった。ダンスの練習も必要だが、着物の着付けも習わなくてはと改めて感じた。(渡津記)

以上

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

シンガポール大会の思い出

早房技術士事務所 所長
技術交流委員会 早房長雄



9月7日に9号台風が通過した翌8日、晴天の成田をJAL-719で出発した。シンガポール上空の深い雲の中を降下し、緑と川と海が縦横に織りなす平地を5分ほど飛行して、島の東端、南北に長いチャンギ国際空港に着陸した。広々とした建物は充実した設備とサービスで多数の賞を受けている世界的に有名な空港である。

出迎えのバスに乗り、イースト・コースト・パークウェイを市街地に向かう。左手は島の南海岸で、緑の中に点々とリゾート施設、レストランが並び、右手には8階建てくらいの住宅街がある。約30分、案内人の逞しい土産品の宣伝を聞きながらホテルに向かった。

マリナ・エリアに入ってバスは左手にサンテックシティホール(国際会議場)を見て進み、世界最大級の「富の噴水」を廻り、会議場前のコンラッド・センチニアル・シンガポールホテルについた。

この日の夜はタクシーでマリナベイにあるシンガポールのシンボル、マーライオン公園に夜景を見に行った。東側からマリナエリアに、スイソテルホテルなどのホテル群、サンテックシティモールなどいずれも30階以上の高層ビルが並んでいる。その前に地上169mという建設中の巨大観覧車、ドリアン型の劇場エスプラネードシアター・オン・ザ・ベイが見える。シティホール駅の近くセントアンドリュース大聖堂、シティホール、アート・ハウスといったシンガポール川の古い建物が高層ビル群に挟まれている。西側のポートキーからチャイナタウン側のビジネスセンターは新しい高層ビルOCBCセンター、UOBプラザ、OUBセンターなど、その前にある歴史的なフラトンホテルは当時のままで建っている。その西のマリナベイに新しいシンガポール港が見える。マリナベイの東(マーライオンの前)にイースト・コースト・ウェイがあり、建設工事中の建物群がある。マーライオン公園の夜景は東北から西へと素晴らしく、夜風も心地よいものであった。

9日午前には大会参加登録を済ませ、午後からFIDICシティ・ツアーに参加した。マリナベイ開発地区の総合リゾート開発の3つのドームとホテル3棟、スカイパーク・アートサイエンスミュージアムやコンベンションセンター、イベント広場が設けられる「ニューウォーターフロン

ト」は2009年公開予定とのこと。ヨーロッパとアジアを結ぶ拠点として、経済の90%を貿易に頼る玄関港の建設である。

セントーサ島に渡るケーブルを下に見て、マウントフェーバー山頂に向かった。ここも眺望が楽しめる。西のジュロン港から遠くインドネシアの島々が見える。大型船が往来する近代的な港湾に感心する。北側をみるとクイーンズタウン、ホーランドからマレービレジまでの広い範囲に高層ビルが林立している。マウントフェーバーの昔と変わらぬ緑と遠くに見える市街地の緑にほっとする思いがした。

山を下ってナビエルロードへ植物園と国立蘭園を見学。その後、東京銀座と姉妹提携しているというオーチャードロードは高島屋、伊勢丹もあり世界の高級ブランド店、一流ホテル、またエスニックな雑貨やビーズの店もあるショッピングの中心地だ。リトルインディア、アラブストリートを通りマーライオン公園を見学してホテルに戻った。

18時からアジア文明博物館でウェルカムパーティに参加した。ここにはアジア全域の多彩な生活全般の展示や考古学的な文化財で大変貴重なものが展示されている。南中国からマレー、プラナカンのニョーニヤ料理とインドからインドネシアまでの食文化を堪能した。刺激的な香辛料を使わずマイルドな味わいで、デザートも飲み物も種類が豊かで楽しむことができた。

10日9時から会議場で開会式、全体会議が行われた。テーマは①国際的規模の企業と地場企業の更なる協力関係②新契約的関係モデル。全体会議に今回はワールドバンクとJBICが参加したことが特筆される。

18時30分よりディナークルーズ・ツアーに参加した。ニコルハイウェイを南下し、チャイナタウンのファーストスクエアでヒンズー教寺院(スリ・マリアン)、中国系寺院(ティアン・ホッケン)などを見ながらカントーサ島を臨むハーバー・フロントに着いた。伊東豊雄氏による建築で水をテーマにしている。ショッピングセンターのガボシティのほか映画館やデパート、プールなどがある。会場の船は赤と金色で飾られた3階層で、夜景を眺めながら最上階でのディナーを楽しんだ。

11日8時30分からワークショップ、テーマ①機会②挑戦③手法、9件があった。昼食時にはAJCE関係者などの3テーブルで藤江さんを送る集会有り、会長、藤江氏、山下氏の挨拶あった。

18時30分から夜のシンガポール・ツアーに参加した。イースト・コースト・パークウェイからチャイナタウンに入り、シンガポール川南からリード橋を渡って川に突き出したような形状のクラーク・キーについた。レストランやナイトクラブが並び人の集まる所だ。リバークルーズを楽しむ船や対岸の眺めも美しい。屋台の大きなテントの下で楽しい夜を送ることができた。この後、ホテル北側のビクトリアストリート近く、ブギスの市場で土産など買い物をして戻った。

12日9時より全体の要約報告と業務の実務ワークショップ3件があった。12時よりASPAC総会。昼には安倍首相辞任のニュースが入った。16時よりFIDIC総会開催。

18時からガラパーティに参加するためタングリロード近くにあるシャングリラホテルに向かった。シンガポ

ール最大級を誇る敷地に熱帯植物が多く、ホテル棟にタワー、ガーデン、ヴァレーの3ウイングがあった。巨大な大理石の柱が並ぶゴージャスなロビーと会場である。ダンス音楽、アルト歌手とバンド演奏があり、飛び入りの男性歌手(藤枝事務局長)の玄人はだしのよく通る美声の「ベサメムーチョ」に驚きと万雷の拍手が送られた。FIDIC会長の挨拶とケベックの紹介があり、広い会場はダンスパーティへと盛り上がった。楽しい雰囲気のを過ごすことができて、またケベックで会いましょうと互いに挨拶してホテルに戻った。

13日20時、チャンギ国際空港に向かった。リムジンバスの中で空港近郊の土地1.8haに宇宙飛行体験もできると言う「スペースポート・シンガポール」が2009年に完成するという話を思い出した。JAL-710(22:40発-成田14日6:40)は予定どおり北に向かう。シンガポール島の南岸がくっきりと明るく輝いている。島の中心部分から明りが少なくなりマレー半島は真っ暗だった。緑の豊かな国際都市シンガポールを後にした。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDIC大会に参加して

有限会社大野化学機械工業所 代表取締役社長
AJCE 監事・技術交流委員会 大野 欣雄



9月8日土曜日、機中で時刻を1時間遅らせると夕暮れのチャンギ空港に降り立った。入国審査を経て出口へ向かうと、カウボーイハットをかぶり自動小銃を構えたガードマンが目につき、外国へ来たのだという実感がわいてきた。空港から市街地に入ると、超高層ビル群の下はいたるところ繁茂する街路樹や鮮やかに咲きこぼれる花々に満ちており、ガーデンシティと呼ばれるようにまるで公園の中を行くようである。後で聞いたことだが、市内のすべての樹木は市当局によってコンピューター管理され、必要に応じた調整がなされるとのことである。

ホテルで小憩後、近くのサンテックマートを目指したが、車の疾走してくる道路を3回横断しなければならない。現地の人々が器用に渡るのを見て昔の日本の状況を思い出した。サンテックマートの中は夕涼み気分の家族連れや若者で賑わっていて、ホーカー(屋台=庶民の食堂街)はどの店も満席状態。Japanese Restaurantの看板のところで席の空くのを待って軽い夕食を済ま

せた。和食弁当の味はまあまあだったが、ホテルへ戻りカフェで一服した紅茶はさすがに美味しく、その後滞在中は毎朝「Tea Please」に決めてしまった。

翌9日は9時から登録受付のため大会会場ロビーで場所を探すもFIDICの案内はどこにも見当たらず、最上階からいろいろなイベント会場を横目に下まで降りてきて10時頃漸く係員に誘導され事務局前に辿り着いたのであった。

夜はAsian Civilizations Museum内でウェルカムパーティがあり、レセプション後はテラスからシンガポール河の夜景を楽しんだ。ライトアップされたビルやエキゾチックなディスプレイ、川面を行き交う船の灯火などにしばし蒸し暑さも忘れていた。館内の展示はアジア民族の文化史が広範囲に亘って紹介されており、興味深く見て回ることができた。

9月10日、Mah Bow Tanシンガポール政府開発大臣を迎えて格調高い開会式は歓迎演説に始まり、多民族

国家らしいアトラクションが繰り広げられ、特に獅子舞は圧巻であった。午後は全体会議に参加。JBIC(国際協力銀行)飯島部長の講演ではわが国の国際協力についての認識を新たにした。

9月11日、12日はワークショップに出席した。12日の地域フォーラム ASPACの会議では議長国である日本の廣谷会長が活躍された。

12日、大会最終日のガラバンケットではシャングリラホテル大ホールに参加70余ヶ国の人々が集い、次々と運ばれる料理に舌鼓を打ちながら談笑しカメラを向けあった。我々のテーブルにはガーナやスーダン、ケニヤなどアフリカ諸国からの参加者が多く、たいへん陽気で賑やかであった。彼等はシンガポールまでの2回のトランジットを経て2日かかって来たとのこと、多くの日数と多額の費用をかけて参加するのはFIDICへの熱意と期待がそれだけ大きいということであろう。以前に参加したパリ大会の時に比べ、家族連れで来ているアフリカ諸

国からの人々も多いように思われた。同じテーブルの早房氏が最高齢者であることがわかったと、テーブルを囲んでいる全員がメニューの紙にサインをして同氏にプレゼントするというすばらしい交歓的一幕もあった。宴たけなわの頃にはステージ上から藤江氏の若々しい歌声が流れ、続いて藤江夫人との軽やかなステップに誘われたカップルが我も我もと加わりパーティの熱気は高まるばかりであった。やがて次期開催地ケベックの紹介がスクリーンに写しだされ、再会を期して散会したのであった。シンガポールは地球の東西南北の要に位置しているため全方位的な交流が可能で、今大会に南半球諸国からの参加者も多数見受けられた。各国の人々が皆一様に英語を共通語としてコミュニケーションしているところは民族も国家も超越した地球規模の社会であり、日本もその一員であるためには克服すべき課題がいくつかあることを感じた。

特集：2007年FIDICシンガポール大会報告

FIDICシンガポール大会 初参加の感想

いであ株式会社
橋梁グループ グループマネージャー 伊藤 茂也



大会3ヶ月前の6月に、会社からFIDICシンガポール大会参加の要請がありました。私は会社に入って15年間、海外での仕事や国際会議の経験が無く、要請されるまでFIDICとはどのようなものなのかまったく理解していませんでした。また、英語を話すことはもちろんのこと、ヒアリングも出来ない状況でしたので、参加するまでは不安な気持ちで一杯でした。その後、FIDICの活動内容やFIDIC大会の内容、出席するメンバーなど確認しましたが、十分な準備ができないまま参加する事になりました。

会議は、9月9日(月)～12日(水)の公式行事に出席しました。会議では、パワーポイントに示されるキーワードの単語を成田空港で購入した英和辞典で調べながら、なるべく理解するように努めました。ランチタイムや休憩時間では、他国のコンサルタント技術者との交流の場でしたので、英語でコミュニケーションがとれる会話

力があればもっと楽しい時間が過ごせたと思い、日常的な英会話が必要であると痛感しました。

今回の会議参加で得たものは沢山ありますが、特に大きなものとして以下のようなものがありました。

- ① Workshopのテーマから、各国のコンサルタントの方も同じような課題を抱えていることが分かった。
- ② FIDICやAJCEの活動が理解でき、海外事業についても考えるきっかけとなった。
- ③ 様々な国の方の発表を見聞きしたことで、プレゼンテーション方法が習得できた。

最後になりますがシンガポールは、地震が少ないこともあり超高層ビルが多く社会資本整備が非常に進んでいるとともに、複合的な民族国家であるため、様々な文化が楽しめる都市でありました。また、屋台を始めとする食事なども非常に美味しく、今度は家族旅行などの観光でぜひ訪れたいと思いました。

参考資料

略 語 表

略 称	英 名	和 名
ADB	Asian Development Bank	アジア開発銀行
ASPAC	Associations in the Asia-Pacific Region	FIDICアジア太平洋協会連合
BIMILACI	Biennial Meeting between International Lending Agencies and the Consulting Industry	国際融資銀行とFIDICとの会合
BIMS	Business Integrity Management System	公正管理システム
BPC	Business Practices Committee	業務委員会
CB	Capacity Building	能力開発、能力育成
CC	Contracts Committee	契約約款検討委員会
CE	Consulting Engineer(s)	コンサルティング・エンジニア
CPD	Continuous Professional Development	継続教育
DAB	Dispute Adjudication Board	紛争裁定委員会
DB	Design-Build	設計、施工一括発注（契約）方式
DBO	Design-Build Operate	設計、施工、運営一括発注（契約）方式
DFI	Developing Finance Institution	開発融資機関
EC	Executive Committee	理事会
EFCA	European Federation of Engineering Consultancy Associations	ヨーロッパコンサルティング・エンジニア協会連合
FEPAC	Federacao Panamericana de Consultores	FIIDC中南米アメリカ連合
FIDIC	International Federation of Consulting Engineers	国際コンサルティング・エンジニア連盟
GAM	General Assembly Meeting	総会
GAMA	FIDIC Group of African Member Associations	FIDICアフリカ協会連合
GPIMS	Government Procurement Integrity Management System	発注者のための公正管理システム
IFI	International Funding Institution	世界融資（金融）機関
JBIC	Japan Bank for International Cooperation	国際協力銀行
LDC	Less Developed Country	発展途上国
MA	Member Association	会員協会、各国協会
MOU	Memorandum Of Understanding	覚書
ODA	Official Development Assistance	政府開発援助
PFI	Private Finance Initiative	民活方式
PL	Professional Liability	業務上の瑕疵責任
PPP	Public Private Partnership	官民協力による業務遂行形態
QBS	Quality Based Selection	技術（品質）による選定
QCBS	Quality and Cost Based Selection	技術（品質）と価格による選定
QMS	Quality Management System	品質マネジメントシステム
RM	Risk Management	リスクマネジメント
SD	Sustainable Development	持続可能な開発
TCDPAP	Technical Consultancy Development Programme for Asia and the Pacific	アジア太平洋地域の技術コンサルティング開発プログラム
TOR	Terms of Reference	基本方針
YP	Young Professionals	若手専門職
YPF	Young Professionals Forum	若手専門職フォーラム（会議）
YPMTP	Young Professionals Management Training Programme	若手専門職マネジメント研修プログラム
WB	World Bank	世界銀行
WS	Workshop	ワークショップ